特52
82

童兒の友　目錄

第一、印度國郵便脚夫　貳丁
第二、マウナロアの噴火口　三丁
第三、[illegible]水　六丁
第四、エルサレムの話　拾丁
第五、つじ　拾四丁
第六、針より眞實と愛と　拾五丁
第七、「レプタ」二つ　拾九丁
第八、モント、ブランク　二十二丁
第九、獅子の口と通て酒と禁む　二十七丁
第十、枯草塚の紀念碑　三十丁
第十一、獄理の撫子花　三十二丁
第十二、聖書の話　三十八丁
第十三、耶蘇盲者といやそ　四十二丁
第十四、雛ゝの親父　四十三丁
第十五、眞珠商賈　四十五丁
第十六、幼さ籠師　四十九丁
第十七、磐石　五十一丁
第十八、合衆國議院の祈禱　五十二丁
第十九、フンガルの洞　五十六丁

第廿、乙女の善行　六十丁
第廿一、賢愚の山羊　六十六丁
第廿二、善良の牧者　六十八丁
第廿三、ハテーの隣人　七十丁
第廿四、獅子知恩　七十四丁
第廿五、忍とき　七十六丁
第廿六、偷乘　七十七丁
第廿七、教法改革者の像　八十丁
第廿八、旅人木　八十二丁
第廿九、ワシントン府の公廳　八十四丁
第三十、英王約翰法王の使に謝罪そ　八十六丁
第卅一、モーセの話　八十九丁
第卅二、少女エミリー　九十丁
第卅三、面白いとき　九十二丁
第卅四、かゞやけるもの　九十四丁
第卅五、「クリスマス」の歌　九十六丁
第卅六、ワシントンと其父の話　九十八丁
第卅七、ワシントンの住家　百丁

印度國郵便脚夫の圖

東京知新堂銅製省八刀

第一　印度國郵便脚夫

印度國の郵便脚夫ハ大概正直で質意のあるものと擇み給金ハ眞に些少なれど其勞力と患難ハ中々給金のやうに些少でハありません殊に廣い野原と通行するのハ難義至極のことで雨の時候に毎年旅人と困らせるのみでなく度々危險いことがございます夫故此脚夫さちハ恐ろしい天氣に撞見そのみならず急流の河もあれば大毒の蛇も居り猛き獸もあつてマラバー濱と行く時ハ毎日此等のものに撞見さぬことハないとまうしまそ脚夫ハ書にある通り長い棹の先に信書囊としばりつけ他の人ハ眞鍮の輪ともつてガラン〳〵鳴らして毒蛇とにげそ工夫として行きまそ日本の郵便脚夫も場所によつてハ數里の間人里もない所と通り玉の汗と流して煮られるやうな暑氣と忍ぶときもあり雪の積つた山中と狼の足跡と見ながら行くときもあり又ハ盜賊に出逢ふこともありまそが印度のに比べて見れば余程容易なものでございまそ偖印度のハ三四人づゝ組合になつて大風雨のとき終夜走つて行くこともあり生ひ繁つた木立や廣い野原と前後に炬火とる人がなつて互に大なる聲として喚びながら獸と威して行くハ我國の早打のやうで勇ましく見も然し或る時ハ急に象や牛や虎の群がつて居るなかに出て仰天そることもありまそ夫故炬火夫や炬火の光が脚夫の道中と守つて行くので他に頼とそるものハありません木立と通過て廣野に出れば立上る雲間と洩て出る月のさやけく照そハ慣た道でも餘り快くハあるまいと思ハれまそ夜の明る頃漸く次場に達て信書とば先の脚夫に渡し終夜走つた脚夫ハ朝食と喰ふもあれば眠るもあり思ひ〳〵に休息といたしまそ茲に一日休息そると先方から來る信書があるので此度ハ夫と持つて昨夜の道へ返つて行きまそ其夜も昨夜と同じやうに恐ろしいことに撞見しながら又一夜走けつゞけとやりまそ夫からハ一週間の非番でもる〳〵と二夜の疲勞とやそめるといひまそ開けない國にハ難義至極のことの多きものなり

第二　マウナロアの噴火口

噴火山とハ地中の火氣と吹出そ所にて其景色と云ひ其勢と云ひ中々愉快に見もるものなりマウナロアの噴火口についてハ面白き話あれば記して示さん

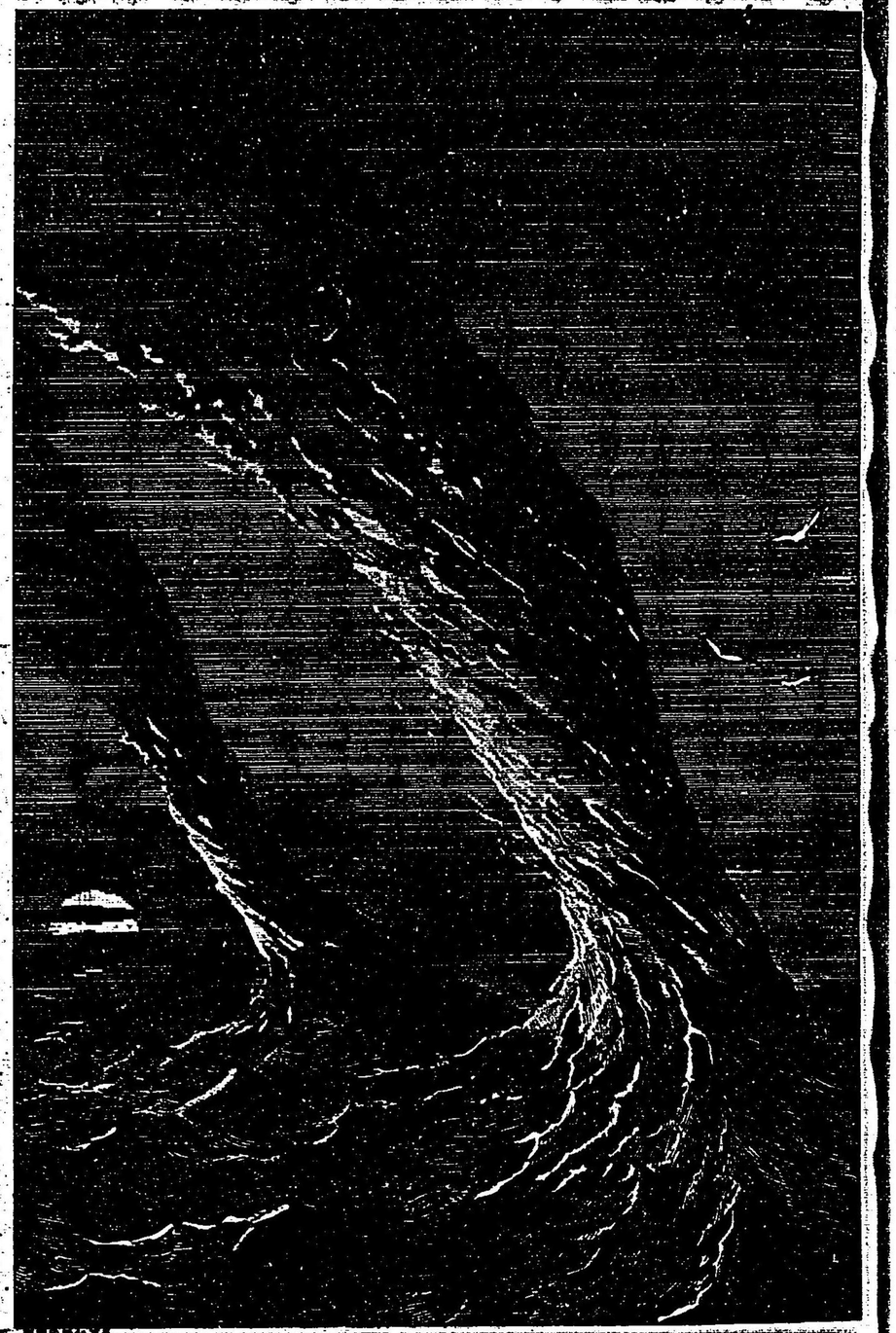
噴火山ハ世界の煙筒と云ひて世人の云れるが如く大概世界中にあらぬ所ハなきくらゐなり時としてハ海底より吹き出そことあり近頃我國へ來遊せられさるハワイ國皇帝の統轄し玉へるサンドウヰッチ全島ハ噴火の作用にて海底より突出せるものなり其中最大なるハワイ島に數多の山あり

マウナロアハ其一なり

マウナロアと云ふ義にて外國より此國に至りし教師等が其山の破裂のことと記せしが其記そところにしさがへば

マウナロアの噴火口ハ海面上一千四百丈の高さにあり通例穏なれども時としてハ破裂して恐ろしき地震と來そことあり且「ラバ」と吹出し山に沿て谷に流れ流れ〳〵て岩石とこがし雜草とやき冷るにしさがつて漸々徐に流れ平地にいで遂に海にいりて止む此圖ハ其山の頂にある噴火口と示そものにハあらず其中腹にありて常に火煙と吹出そものにして海面上四百丈の高さにあり其名とキラウエアと云ふ其周圍殆三里半ありて口

のうちにハ「ラバ」と充し恐ろしき音して吹き出し夜ハ其火四方を照して其様一層そさまじと云ふ今より四五十年まへまでハ島人等皆此噴火口にハペレと云ふ悪神住み玉ふて此の如き祟りを爲そことゝ信じゐりペレとハ如何にも恐ろしき女神にして土民ゞ其聲ありと思ふそさまじき聲ハ山の頂上より聞ゑ其激怒ハ愍あるべく人々の上に炎をふらせ人々ハ皆其樶幕に懼れて其怒をとゞめんゞゐめに供物を携へゝして行くものゝあらざりしあり(人智のひらけぬとき道理の解らぬものゝ神ありと思ふもの少からゝ我國にも日月あゝの己に遠くして知れにくき所より神ありと思ひて拜み又供物あゝを爲そものあり嘆はしきことゝあり)されゞ此島人ハ農夫あれゞ野菜を献じ漁者あれゞ魚を捧げ又活あゞら豚を供へてペレの怒をとゞめんとせしこともあり甚しきにいたりてハ「ラバ」をとゞめんとして人を供物と爲したることもありしと云ふ初めて宣教師ゞ此噴火口を見物せんとして登山せしとき途中にて「オヘロ」と云ふ苺の如き實をとりてくらひしを見て土人ハ大に驚き互に氣をもみて君ハ供物もせゝペレのものを食ひ恐くハ無難にて山を下ることハ得ざるべしゝと云ひしゞ恙なく歸り來りされゞ又々大に驚き若し我等あの果を喰ひしあらゞペレハ必ゝ誅罰し玉ひしあるべしと云ひて尚も恐れさりカピヲラニと云ふ皇女ゞ病にかゝりさるときハ十人の臣僕を犧牲として供へさることあり後其病ハ本復せられしゞ夫ハペレの能力にハあらゝ眞の神ゞ此皇女に救主の愛を知らしめんゞゐめに本復せしめ玉ひしあり然ゞ此皇女ハ後教師にあひて神の愛を認め



ワイ島のうちにて初めて「バプテスマ」と受さりさて篤信の皇女ハペレと拜そるの恩らしきことと人民に志らせんとて或るとき自から山にのぼり噴火口に下り其所にて活る眞の神と拜しペレの祟あきと見せ迷とどうんとせしに人々い驚き憂ひ若し皇女の身にペレの祟あらば容易あらぬ大事ありと頻に之ととめ涙と流し忠心と示して諫めされど皇女ハ之と聽き玉ふ筈はあく若し我に其祟あらば爾等ハペレと信せよ若し我無事にして歸り來らばイエスキリストと信せべしと茲に於て忠義の人々い恐怖あざら皇女に從ひて噴火口に至り身と戰はせ手に汗と握り今にもあれ吹出そ火炎ハ皇女と怨入み穴の底に引いれんかと瞬もせそうちまもりしが眞の神ハカピヲラニと守り玉ひて少しも害に遭ふことと許し玉はそこれにてペレの權威と打破り世の造物主にして贖者ある神に祈禱と爲し讃美と歸しさり偖皇女ハかくして無事に山より歸り來りされば人民ハ驚もわり悅ぶもわりペレの權威あきと知り再び之と願るものもあく夫より偶像と信そるもの福音の光に照され此皇女ハ今より四十一年前に世と去り玉ひしが夫より眞の神ハ人々の信そるところとあり偽の神ハ盼鼠と蝙蝠の間に捨られ(聖二、廿)今ハ至るところ天地の造物主と父としあがむる人のみあり然ば天下の人擧て其國開化に進ひの速きと讃嘆そるも宜あらそや

第三　龍膽水

圖書ともて物と示そハ長き說明と爲そよりも解りよきものあり今龍膽水の光景と出そに美麗しき銅板の畫と用ゐ然れども多少說明あけ

れが解らぬ所もあるべしと思ひいさゝか左に述べし

龍騰水と云ふ文字を用ゐたつゝぜゝ云ふ言葉あらば愚なる人々は角の生へた蛇のごときものありて海水溺水と卷揚げ又は龍卷は蛇の天上するあり雨と思ふものもあるべけれども決して龍と云ふものあるにあらぜ又蛇が天上するなどゝ云ふこともあるものにはあらぜ中には確に龍騰水のうちにきら〳〵と光る龍の鱗と見えりと云ふものもあれど決して然らぜ光るものゝ見もるは電氣と發そる故あり龍騰水は風のために水と卷きあげ或は雲と爲し或は雨と爲そものにて其理を知れば少しも不思議あることはあらぜ然しあるは人は外に風あくして水の卷揚ることもあれどまた〳〵龍のしわざなりと思へど風は空氣の不平均より起るものなれば或る所にかぎりて起ることも決して無きにはあらぜ世の人々が天然の奇觀と云ふは美しくして大く且見るもの之を奇として感ずる故にかく云ふなり吳々も龍のしわざなりとて奇觀と云ふにはあらぜ

龍騰水は陸地にある人よりも海上にある人の見ること多し初め黑雲中天に出ると見れば忽ち其眞下にあたる海の水波を起し中に集り見る〳〵卷かれて高く上り旋り轉りて喇叭の如き形狀となり上の雲よりも同じく喇叭の形狀の雲と下し來り中天にて上下相合し一本の柱と爲る之を世に龍騰水と云ふなり柱の外は闇黑なれども柱の中は明く光ありて空虛の如く見もいよ〳〵龍騰水と爲るときは恐ろしき勢ともて雷鳴の如き音してもるを出し其光景美しとも恐ろしとも凄じとも云ひたのおき程

なりしとして高さ七八丁ぐらゐの柱ありと云ふ若し此龍騰水走り來りて船にあたらば如何ほど堅牢なる大船にても粉微塵になりて吹散らさるべし沙漠に起る沙暴風も海に起る龍騰水も共に旅人航海者を害そることさびゝ〳〵あることなり遂に蒸されて雲と爲りて終ることなり又大雨の如く下りて海に落るあり麗なる天氣の時に起るものは眞直に上れども風の強きときは斜に歪みて起る其理は低きところの風強くして雲よりも柱と吹くこと疾きもあり是の如き場合には非常に大なる聲して柱の中央より折れることあり又雲中より電光を發つことあり其形狀もろゝあらぜ喇叭の如きにもあらぜ時としては普通の筒の如く上も下も同じ太さのものあり然し大概は上の方下よりも太し龍騰水の起るときは雲の色黑く霧とふらしおどして多く雷鳴の時の光あり

此奇なる奇を觀て大胆にも詩を作りし人あり夫は一千七百三十年にエデンバラにて生れさるウヰリヤム、ファルコチル氏なり此人の父は薩摩侯にて不思議にも其兄弟姉妹は悉く啞子なりしがファルコチル氏は滿足の童子なりしとも若きときより商人の弟子となり幸に怠らぜ敎育されたれば初めは貧しき舟人なりしが後には名高き學者と爲れり此人親しく難船に逢ひて破船の時を作りしが其詩は人々の口に膾炙して甚著名し然し此詩は人は不幸にも終をよくせぜ一千七百六十九年「アウロラ」と云ふ船に乘りて印度へ向け出帆せしが喜望峯に着きさるせでは知れされど其後如何なりしや船の着しさる所なし多分難船して終りしなるべしと云ふが氣のどくなることなり

第四　エルサレムの話

諸君が左側の畫に於て見らるゝ通之れエルサレムと東より見る圖にして是そあれち賢王ソロモンが住ひさる都城でございまそソロモンの神より指示とうけて美麗壯觀き神殿と立てましさ諸君の此畫のうちに圓頂殿と見らるゝあらん是れソロモンの立さものにのあらぜ其ありし近傍にさてさるものにてソロモンの造りし神殿にの神のしべ〳〵ユダヤ人に御自身とおあらのしあさいましさユダヤ人が眞實の神と忘れて偶像と拜そるやうにありしとき神の惡人どもとつのして其美麗ある神殿と亡ぼし人民とば七十年の間他國へ俘囚としてつりのしておきておもるしあさいましさ夫からユダヤ人の夢と覺して再び神殿と築きましさが前のにくらぶれば劣さるのでしさ咽下過れべ熱と忘れるユダヤ人の其當座よく身と慎み神と敬ひましさが又漸々奢侈の風と增長し又神の義罰とうけて其神殿とうちこのされ其後又罪とくいてよく神と愛し敬ひ神のもるしとうけて此度の蠟石で美麗き神殿と造りましさ我々の親しき救主エス、キリストの度々其神殿に來りて人々に數へ病あるものといやしあどあさいましさ然し諸君の知らるゝとはり惡きユダヤ人の此都城の外にて其救主エスきみと十字架に付されべ神の怒にふれ異邦人に攻められ其神殿もうちこのされ多の人々殺され今も尙其地にユダヤ人ありて此都城に住ひさくも思へども己の惡と改めざれべ神樣もこれどもるさぜユダヤ人と亡ぼしさ惡き人々のユダヤ人と嚴しくさらひ彼等が其寺院に來ることともるさぜ寺院の門まで來るものあれべ殺して

しまいまそ其人々ハマホメット宗と信ぜる人で此書に見もるが如く其寺院ハ美しく天下に比類なき程なれど信ぜるものゝ忍様のきゝあきことハなハゞしく神ハ非禮とおうけあさらぬものもゑ決して其禮拜とれうけあさる筈ハでございません

今此書に見もる寺院と「マスク、オブ、ヲマ」と云ひまそゞエルサレムと云ふ都城ハ高い城壁でかこまれさ小山の上にあつて東南西の三方ハ深い谷ゞあり其中に四の門ゞありまそ北方にあるとダマスコと云ひ美しき門にて其上にハいろ〳〵の裝飾あり西にあるとヨッパ門と云ひまそゞ此書でハ見えません其所ハ乞食の集つて居ところで如何にもきゝさあいところでございまそ此圓頂殿の近くに一の門ゞありまそ之ゞエスの終日歌へてつゝれさまひしとき出たまひし門で之と出れバ流れあり今ハ乾きて氷ハあけれどキリストゞ橄欖山(此書の手前の高き所)に行くとき渡られさる所でございまそエスハたび〳〵此山で祈禱と爲し人々の罪と考へ後にハ其罪のさめに亡ぶるであらうとお歎きあされたのも此山でございまそエスゞ其螺石造の神殿と見て一の石も石の上に殘されしと仰られたるも此所でしたゞ果してエスの云ハれさとはり其時ゟ四十年程さつて全く亡ぼされましさ又エスゞひどくれつゝれあさつたときハ山の頂上にハのぼらを此山の東(手前)の麓に住ひした三人の同胞ラザロとマルタ、マリヤの家にハたび〳〵おいでにありましさゞその所とベタニヤとおへましさ聖書にエスゞ驢馬に乘つてエルサレムへ行るゝとき人々ゞその道に衣と敷てホザナ主の名によりて來

るイスラエルの王ハ祝ひあうとエスと讃めあゞち從がつて行きましさのハこの道でございまそ

又此書の前に四角に圍はれてある所ゞ見えまそゞ之とゞッセマネとまうしまそ若し之ゞ聖書にあるゞッセマネにちゞひあくべ此所ゞエスの祈禱とおされた所でユダの内通によつて捕へられさ場所でそゞ神の獨子あるキリストゞ忍もさゞしく言葉も行爲もさゞしきに我等の罪とわゞあはんために惡人にとらへられエルサレムに引かれさとハ如何にも痛ましきことでございまそ

エルサレムの周圍ハ岩や石のみ多くありまそゞ夫故草木の生つところハ少く唯橄欖の古い木ゞ僅ばかりでございまそ夫ハユダヤ人ゞ幸福でよき有様にくらして居る頃にあつさ木であらうと思はれまそ其様に草木ゞ少きもゑエルサレムのちゞくハ氷に至極不良由で唯所々に井戸や氷溜のやうなものゞあるばかりでございまそ夫もゑ水屋ゞ少しづゝ氷と賣てあるきまそゞ山にも野にも水ゞあいゆで水桶のうはりに山羊の皮とまるひきにしてその首と三足とかさく結り大きな袋にして一の足と呑口にし注文ざけその足ゟ氷と賣まそ之かし驢馬につけて賣に來るにハ桶や樽よりも結りつけるに都合ゞよいかも知れません此のやうに氷ゞ拂底もゑ身体と流ふ人ゞ少おく臨うございまそ

又其家のことと考へまそに材木ゞおきもゑ家も木造とていおく屋根でも壁でも床でものこらず石造りです石造りハ堅固でよけれど木ゞ少きもゑ薪木にハ殆ど困り石炭でもあるおら

が都合がよけれど是もおしそこで人民わかくるしき工夫をしそ家畜の糞をかはゝして薪木のかはりに燃しそ居まそ氣候わ至極穩で四季をもに大概快く人々ハ屋根を平にし階子をかけ畫そ其上にのぼりて眠りまそ昔神様がこの土地をお恩みおかゝる頃わ此のやうに樂しき幸福ゐ所をさがましたちち然るに彼人々ハ神を忘れ神に成きそ偶像に翻れ神の代にそれを拜そるもゐ神わその行爲をおきちひおさつて得れゑ得ちゐ神の恩をおとのおげおさのまじさ夫もゐ今での土地に行そ見まそおちゑ見るも氣のどくゐ有様にありはそ昔又ゐ地又のごとき富み樂えゐる玉が住め地を外國と通商し繁昌しさる所ろとい思はれぬ程でございまそ

第五ニそひのセ

われちゐニえの[illegible]そひつじを[illegible]われちとうへるの[illegible]きりえトね[illegible]つねにわれちをかゝ[illegible]はおれをてい[illegible]あそくさひらにきゝ[illegible]はやさおへりゐ[illegible]

あつきあつの日　さへがさみ

つかれおぼゆる人とゐそのときわ[illegible]きよきあゐれどゐ[illegible]ねひしげるゐ[illegible]てうげにゐそべ[illegible]もふべにわ[illegible]めやみのみてにホゐ[illegible]やそくねむれるゐ[illegible]われそそわ[illegible]ゐ山がとゐげよわきゐ[illegible]そひつじを三[illegible]ゐ山えのそしべしを[illegible]みちのほかゐ[illegible]みちわゐるとゐ[illegible]ゐみわちしゐ[illegible]非可やせまくそをおるのゐ[illegible]みちふみそ[illegible]

ゐきエえきみの至極ホあと[illegible]ゐ[illegible]われわまをとのゐ[illegible]ホをひゐひを[illegible]

はれわさちゐるゐ[illegible]をひつじを[illegible]

えんをゐむのと[illegible]のをみゐが[illegible]

いつくしみゐる[illegible]世にをみを[illegible]

われらをかへる[illegible]かひぬしの[illegible]

みをへろをしも[illegible]よろをへせ[illegible]

あまつみくに[illegible]いるとき[illegible]

ゑとともにを[illegible]

第六　生命より眞寶と愛を[illegible]

近頃英國の或蒸氣船ゐウアプールより出帆して四日の後に至りて船荷の後より男兒の隱れ居ゐるを發見しゐに此兒わ船客の中にも乘組水士の内にも父母兄弟わ更ゐ乃朋友の一人さにゐるにゐらねば誰ゐりて此兒を保護るものゐく何方はり來りし者ゐ何處へ行く者ゐ誰も知人ゐりしを年齢わ僅に九歲にて身にわ最

見苦しき襤褸と繞ひされども顔色の美麗さ玉の如し熟その容貌と觀て其爲人と察するに罪あく害あくして惡事と知らざるものゝ如く憨誠に忍正しきこと顔面に顯れさり偖斯て拾置べきにあらねば兎に角此船の一等按針官の前に引出しければ按針官い最嚴に立出て件の男兒に向ひ汝い何故に人目と掠めて此船路と盜みしやと問ければ彼兒の答に我糧乏い貧乏で兒に給養ることい能はせぬ又兒にい叔母があるとして亞米利加のハリファキスに在そが彼方へ遣るにい船賃がないと申しさ夫ゝら兒い一人で叔母の方へ往さいと欲ひまして此御船に乘ましさと云ふと按針官い其言と信用せぬして嘲やう是い此小兒の一存にていよもあらじ必ず弱に手引して此兒と乘らせし者のあるあらん如、此偽計にい屢々欺られされども亞米利加行の船い何時も大抵出帆の後一両日にして荷物の間に匿れさる船路盜人と見出そこと多し此盜人い實に五月蠅もあり殊に費用もかゝることあれど流石に生さる人間あれば異逆海中に投棄ることもあらぬ又餓死さそることもあらねば止と得ぬ盜人に餉と送りて飢と凌がせ盜人の望の儘に無賃にて亞米利加まで載せ行くことにいありぬれども何れも船中にて使役そると例とそ然れども是等の盜人い貧しき賤夫あれば使役さるゝい厭はぬのみゝ却て歡び望のごとく無賃にて渡海そるとい盜人に起錢てふ酷に異あらぬ實に口惜しき事にぞありける然雖然此兒い不慰にもせよ必定一人の所爲にあらで船中水士の内に手引しさる者のありもやせんと疑ひければ故に無情非道に取扱ひ毎日引出して糾問それども其答る所い毎に

易ることあく日々に同じことあれば如何にも剛腸なる狡兒かあと按針官は憤怒と恐びかね頭首掴んで引据つゝ彌々事實と告ざれば今より十分時間に帆桁の端に引揚て絞殺さん覺悟せよと聲あらゝげて脅迫つくれば憐むべし此方は邊に見知る人さへあらざれば乘合の旅客水夫は數多あれども誰ありて助くるものはあかりけり按針官は片手に時計打ひらき秒針のピチ〳〵と早くも廻りて八分も過されば彼兒の命は秒の一聲毎に縮み行き今生の別れはや已に一二分の間とあれる心の中やいかあらん幼心の女々しくも慄然恐懼と爲ゝあらん乎否々彼兒は中々に更に恐懼る氣色なく卓然と立て頭を揚げ面色青ざめて露の涙もおとさぬ實に勇ましき健氣なり按針官は此有樣を吃度見やりていひけるやう是小兒よ能く承れ其方が命は最早二分の間なるぞ早く實事を申立て一命を助かるやうにしやれとありけれど小兒は固より惡意ありて船賃を盜まんと云ふ存念もあらず唯幼心に乘込さへそれが行るるものと思ひたるまでにて偽りて命を免れんとはせず其顏打守り兒は只今神樣に祈願まして宜しうございまそかと問ければ按針官合点と仰見て大胆も甲板上に跪きて合掌し天を仰ぎて我主の祈願を願し且曰く愛そべき我主耶蘇基督よ速に其天の宿に召連給へんことを願ひ奉ると嗚呼此兒は安じて一死を能くそれども偽と言ことを能はず覩るもの悉く手に汗を握りて心を塞しけり流石に嚴酷なる按針官はいふも更なり情知らずの氷火夫に至るまで皆酸鼻して共に袂を絞りけり按針官も今は冥に堪うねて彼兒を兩手に抱き揚げ顏をり寄せて云ける

り汝が云ふ所は一々皆信用しさりと雖此小兒が信實のために生命を惜まず一死を懼れざるの情狀貴ぶべきの光景は此船中未だ嘗て見ざる所にして此兒は實に死ぬるとも偽を云ことを能はざる者乎神を信ずるものは神之を助け玉ふことを常に是の如きか是より先には誰ありて此兒に接交ものもあければ助くるものもおらじ其以後の船路には船中十分の朋友を得て皆これを憐れみ助けて悉く深切を盡しけるとぞ後世の之を讀むものも此兒の愛そべく敬そべき善行を學びて信義を守るに勇敢にして詐偽虚言を恐誡めあば道に違はざるに庶幾らん乎

因に云ふ我國の人民は概して免れざるの一大罪科あり上は縉紳貴顯の方々より車夫馬丁の族輩に至るまで皆能く偽を言もの多し蓋し我國にては虚言の大罪あることを知らざるの當時の風俗を觀るに禮貌儀容を失はんよりは寧ろ巧言諂諛の優れるに若かずと心得て上下一般に虚言を惡事とは思はざるが如し神の十誡には第九誡に之を誡め玉ひ又默示錄廿一の八には虛言を諸大罪惡の終に數へられ火と硫との燃もる坑に陷して之を罰せらるゝは其分ありといふ嗚呼我日本の士民少しく心して船路盜兒に愧ることなく硫火地獄に陷ること勿れ

第七　レプタ二

馬可傳十二章四十一節已下を見ると貧しき孀婦がレプタ二と神の殿に納めさるとキリストが見そなはして其高は僅に四厘許にしかあらねど貧しき身代にて之を納めたるは富者の多く納めさるよりも殊勝なりと賞られさること

と記さるゝ之について一話ありある家に某と云へる少女ありしがいまゞ年もゆくぬにキリストと信ずることと云あらはし常に何ゝエスのさめにあること神の教會の爲にあることと爲しさきものありと心掛居さり幼き心にもキリストゞ己のさめに死じさまひしことと理解して忝く思ひしおゞ然じいまだ幼きことゝもゑとても今の有樣にてゝ何も爲そことと得ぞ今少しとしとるまで待たんゝ夫も餘りにいくぢおし如何ゝせんとゝいろ〳〵に心とくるしめ居さりしゞ一日のこと我學校にて生徒の集り時校長は今度西國筋へ傳道場とひらきびゞ神の道と知らぬ童男女に神の道と知らせ幸福ある救と教へんと教會にて議決せりつゝ志しあるものゝ金錢の多少と論せぞ何程づゝにても傳道費とさし出してゝ如何と話あり

しに某女ゝ此時こそゝねての望ととぐべきとりあり我愛敬そるキリストのさめに務むへき時あれと其出金の方法と如何そべきと考へあゞち歸り來りさり

是の如く會堂や學校にて金と集ることのあるときゝ某女の父ゝ何程づゝゝ某女にあさへて出金せしむると例とせしゞ某女の考にゝ父より貰ひて之と寄附そるあらゞ名こそ己のものあれ其實ゝ父の金あれゞ己ゞエスと愛そる証據とゝあるべくもあらぞ自身の金と出して見たきものありと幼心にも實く考へ又一層心と苦しめ如何して其金と得べきやと工夫し居さり其時丁度よく或る人より音樂會の切符と貰ひ友立も多く聞きに行くとのこと己も行きさくゝ思ひしゞ若し之と誰にゝ賣渡そあらゞ容易く寄附金と得べしと思ひされゞ其夕父にむ

りひて父上よ音樂會の切符と賣てもよきやと問ひしに父ゝどういふ理由り知らねど賣さくべ賣てもよし然し其金と何につりふ積りやと若し要用のことわらべ切符と賣ぜとも出してやるべしと云ふ某女ゝいあ〳〵夫にてゝ此地よりち也今度西國へ傳道師ゞ行くので志しあるものゝ主のさめに金と出せと校長より話ゞありされべ其入費へ出金じさく思へど父上より下さつさのでゝ自身のでゝあく唯取次とするのみあれべ願ぐゝ自身の金と出じさく夫にゝ切符と賣らねべ金ゝ得られぜと理せめさる言葉に父ゝ感心し自身ゞ書樂ときいてさのしまうと云ふ其望と犧牲にしてキリストに献る為ち夫こそ神の聖旨にかあふことにてさぞゝよろこびさまふであらうと夫より某女ゝ切符と賣りて出金しさりと又某女ゝ此他にも何ウキリストのさめにあることと爲さきものと心掛居さりしゞ學校の同組の生徒のうちにゝ日課の難きにくるしむものゝあると見て力の及ぶさけゝ手傳て學べせされべいつとあく其組のみゝ他の組とちゞひ皆よく出來後にゝ教師も其ことと聞知りて深く某女の深切あると よろこびしと云ふゞ某女の考にゝ教師とよろこべそにゝあらぜキリストの名のさめに其小きものゝ一人に冷ある水一杯と與ふる心得にて矢張間接にエスにつりべることありしと云ふ嗚呼キリストのさめに勞きキリストと愛そることとあらはそさめに多くの金と出して我等のよろこびと知らぜ不幸あるものに福音と教ふることゝ福あることあり

第八　モント、ブランク

「アルプ」又「アルプ」と云ふゝ蓋し白きと云ふ義にして「アルピヲン」ゝ白岩の陸と云ふことあり偖歐羅巴の南部にて北極と赤道との中心にあり二十里より四十里にわさるアルプス山ゝゼルマン、フランスおよびスウツツルランドあどの國々より伊太利と境そる山にてゼノア灣より伊太利亞海の首まで新月形にひろがりたる山あり其山脈の長ゝ二百八十里程にしてモント、ブランクと云ふゝ其中にて最も高き山あり海水より一千五百七十三丈二尺(駿河の富士山ゝ一千二百三十六丈五尺ありと云へべ夫よりゝまだ三百三十六丈七尺高し)の高にあり然ゝ一里七丁と四十二間あり然し唯其高のみと考れば他にも高き嶺ありてモンテ、ロサは一千五百十五丈モント、セルヴァンゝ一千四百八十三丈五尺又アートラ、スピズゝ一千四百四十丈あり て皆常に白雪と戴けり此山々の嶺ゝ太古以來の積雪堅氷に蓋はれ一度も溶て流れしことなく酷暑の時候にも異ることあし蓋しイタリヤ邊の度にてゝ九百五十丈の高に至れべ皆雪ありて山の肌とあらはしたることあし此雪の積りし邊より上の景色の美きことゝ現に其所に往て見るにあらざれゝ筆にも言にも云顯そこと能はぜ純白き衣と纏たる高き山嶺は皚々として中天に綿々無量の深と呈そる大る冰海は渺々として幽谷に横る積雪塊と爲て山腹と下れども之と支るものあく絶壁に落る時或ゝ碎け或ゝ飛び遠望恰ち瀑布の如く碎る音の山谷に響く時ゝ百千の霹靂墜るが如し或る人の考にゝ是の如く高き山は世界の圓形に妨ありと云へど夫ゝ誤あり世界の大にくらぶれべ此くちゐの山ゝ提燈に砂の一粒とつけさる位の割合ありさて雪の溶ざる點に達そるゝ勿論氣

候の異同に從ふものあれば赤道をかぐの最も高き山と寒帶地方の最も低き山と同じことあり赤道近傍にては一千五百七十四丈四尺の上にあらざれば万年雪はあらねどノールウェー十邊にては僅に四百四十八丈にて常に雪あり又メキシコ(中央アメリカ)の都府は七百四十七丈二尺の高にあれど鳳梨檳榔柑橘など田野によく熟せり

モント、ブランクは實に世界中の名山ともいふべし其嶺には雪の溶たることなけれど登山をすると得べし然し一千七百十六年にドクトル、ペッカード並にジュー、ムス、パーマの上りしまでは誰も上りしものなしと思はる我國の富士山の如く毎年冒險の旅人ども其頂上に上れども氣は常に冰點より下にありて呼吸の困難を覺え脈度を速め日中は渇き顏色青白く身體の健康あらぬものは堪られぬ程なり然し上りて見れば眺望の美なること譬るにものなく眼に遮るものとては一もなく足下に歐羅巴全洲を見るべし

人々が此山に登りしことについて種々書記し置くものあれど多くは登山の人々途中で怪我せしことや誤て生命を失ひしことにて氣のどくなる話のみなれば若き人々は雪に埋れる夜路を厭はず行きて歸り來らぬもの多し或る人の句に「おだれそる夜半恐ろしき山路は松の下枝も忍してもけ」と云ふことありしが其有樣實に恐ろしと云ふべしエレー氏の道中記には雪頽のことなどよく記して其危きことを示そに足るものあれば左に其一部を寫し出さん

初に遠く雷鳴の如く響してより二三十秒を歷たらんと思しき頃上にかゝる渠より白き粉とふ

り來し見る〳〵岩石の裂目と埋め此方に罷めべ彼方に始り目ととめて雪の積れる山腹と晩れべ雪頽と離るゝ雪の塊ゝ碎て落れども君と聞ゝ也久しくして硼にひゞく彼方此方の谷々より滑りて落る小き雪頽ゝ衝りて碎け碎けて飛び積れる雪に落る時ゝ麥粉のうちに物とあけこむ如し又山腹に沿て下る氷ゝ雪團の如く下るに從て漸々に大くあり森林の樹木とうち倒し家々村々と全く埋ひることあり常に恐ろしき有樣にて落雪崩ゝ摩擦て滑あること砲の如し然べ其落るの神速あること箭よりも疾く春に至りて氣候のもるゝ頃ゝ人々の非常に之と恐るゝ時にして常に定まりし理と忘れて新しき谷と下り一夜の間に一村と埋ひることあり夫故所によつてゝ大なる土手と山形に作り落來る雪崩と他に洗を準備とあせり又是の如き土地の人ゝ山林とよく守りて神の如くに尊敬せり蓋し其山林の下影にある村ゝ其さめに雪頽の害と免るゝことあれべあり故に森林の木白鑞にとぢられさる如くあり後數年の間皮もあく枝もあく雪崩の災に逢ひしと認る如し云々

雪頽のうちにて最も恐ろしきゝ浮雪頽と云ふものにて大雪の後颶風の起りしとき山國にのみあるものあり其勢ゝ普通の雪崩にくらべれべ又更に一層恐ろしく書書に岩石と微塵にそと云へるゝ是あるべしと思はる

セントプランと南北より見るとき鋸の齒の如く鋭く尖りし峯々左右に列り又ナヤセチ

この谷より見れゝ駿馬の背の如き形狀ありて土人ゝ之と駿馬の背と呼びあせり

第九　獅子の口と遁れて酒と禁ぜ

昔時英吉利人亞非利加の喜望峯の西岸あるゞ

ツテントツトと云ふ地に屯營と備へし頃多くの亞非利加人と使役しゞ其中に樂隊の兵卒ゝ

イトといふ者あり幼時より父に從ひ英軍に居さりしゞ性來音樂と好み麥麵取て美音と發し蘆管もつて笛と爲し好の道とゝ云ひゞ自然に樂に妙と得さり一日其父の竹杖と切て美しき笛と作りしに其音聲恰ち軍樂管に異あらぜと云ふパイトゝ斯ぐまで音樂に器用あれべとて遂に英軍の樂卒とあり喇叭の諸曲と學びて巧に軍樂と奏し常に喇叭と携て之と愛撫しげれべ其光澤ゝ金の如く輝きけり斯くてパイトゝ生得己ゞ好める道ともて英軍に仕ふるあれべ身ゝ軍役にありあがら其喜悅幸福ゝ將校士官におさ〳〵劣らぜ然れぜパイトゝ酒とも如みし故に終に其身と傷ひし一話ゝ稚兒輩の後の鑑とあらんゝと左に說くところと聞たまへ

初パイトゝ下戸ありしゞ血に交れべ赤くある後ゝ一個の酒客とあれり然れ毎朝の調練と怠ち喇叭も大切に取扱ひ決して落度ゝあり

じゞ夏の真中に薪伐とて多の人と山に行き正午も過て歸途パイトゝ見えぬ何所ぞと問者ありしゞ車の中に必ぜ寢てばし居るあらんと云合つゝも歸り來ぬ

實にもパイトゝ吸筒より傾けたりし燒酎に醉て前後も辨へぜ森の小蔭の草枕に本營さして戎仲間の歸りしことゝ知らざりけり先に此所にて兵隊ゞ食ひ殘しさる肉の香と頼て映來る大獅子ゝ四邊と見れど之と云ふ餌あけれども兩脇と枕にしさる黑奴あり屍躰と喰はぬ者あ

れど好て食ふ黒奴あれば徐に近より胴中を脚てぐつと持上しがパイトの夢か幻かと手ひどくも我を取扱ひ怪我とおさせそと眼をひらけば仲間の者と思ひきや長にも餘る獅あらんとの驚くこと大方あらぢさそくの頓智足にて蹴んか凶ばんか然もせば獅子の放さじといよいよ堅く脚へられ今まで衣服にかゝりさる獅の齒我身に嚙入あば愈々絶体絶命あり然れど我手の自在あり何事もあさで此儘に徒しく止まんも無念あり常に帶さる小刀を取出さんと思ひしが生憎今の之もあし先に羊肉を食し腸彼所に殘し置さめと愛のあれば爲方あし然れど腰にの喇叭あり是にて援助を呼あんと思へど漫に吹き鳴さば軍令に反く恐ありとの知るも之是非もあき此身の仕合云ひあば士官も罪とやるそべし隊伍のものの誰にもあれ此喇叭と聞つけて鳥銃携へ來りあば間にあふこともあるべきうとツー、ツー、ツー、ツー音聲も細き叭喇の調子忽ち感應あらはれて不思議や獅子の立止れば又も吹出を喇叭の音ツー、ツー、ツー、ツー、ツー、いよ〳〵細き高音の響き是にて最早こと足れり獅子彊界にの非凡の聲音嘗て聽さることあければ獅子の戰き驚怖て脚へし獲物打棄て森の中にぞ飛去りけるパイトの夫より後とも見を草駄天走に逃獅り我兵營に着くまでの息とも繼ぎを早足の續くと限りに歸り來てありし次第と細々と隊伍のものに語りしに獅子の齒形の衣服にあれど事の頗末の誰ありて信をるものの之かりけり其夕士官の會食にパイトが無謀と審問し翌日其情態を探索しうさ〳〵事實と明確に取糺さんと一隊と該所に派出せしめしにパイトが寢

しといふ所に果して小刀烟草入現してありて周圍にい獅の足跡ふみとめてパイトの手足の交々に土に觸れさる形跡もあり種々証迹ある中に此一話の紛おきと保証そべき明証あり其と何事といふおちが樂卒パイトい其日より離勸めしにあらねども火酒一滴も嘗をして人に語りて云ひけらく慈善の天父い我として獅口より免れさせ再び飲酒の大害とかうむることのおきやうに爲させたまひし聖旨いいとありがさきまでかさじけおしと云ひつることぞ幸福おり

第九　枯草塚紀念碑

今より七十七年前のことゝかや米利堅合衆國の東北部に建られさるウヰリアムス大學校にいと賢き五人の者ありしが彼等屋より集りて亞細亞大洲(日本も此中にあり)の人民が異の神と知らをして徒らに偶像と造り邪神に迷ひ人の心定まらをして恰も浮雲の如き有様と嘆き哀ひことと多かりしと彼等い常によく神の御言葉おる聖書と讀みて怠ることおかりしが或る時馬太傳廿八章の十九節に「汝等萬國に行きて福音と宣べ傳へよ」とある所と讀みし後い尙々心中に傳道の志と起しゝと云ふ一日彼等常より猶世と思ふことの深かりし時例の五人の同志者い學校より道遠からぬ森中に行きて神に祈り傳道のことと議せんとて約しつゝ各時とたがへを會合しさり昔積堆さる枯草塚の下に至り神に祈禱と捧げ又互に談合して一日と送りしことありしが彼等い此時より賢くも其親しめる友朋又い親族に離るゝとも遠き亞細亞に渡海して世界の主にておはしまを異の神の人類と憐み玉ふ御恩と告まはしとい思へども又熱々思ひめぐらせば亞細亞とてい程近かりぬ國おるに彼所に行くにい莫大の費用もかゝり殊にまさ彼所に着し後とても如何にして日々の活計とたつべきやおと彼と思ひ此と惟ひて安き心いおりしとぞ夫より二年と過ぎ今より七十五年前彼等自から一の傳道會社ととり結び印度地方の國民と教導せんとそい思ひさだめたり

是ぞアメリカ合衆國に於て異邦に傳道者と遣る會社の濫觴おり

と知られさり其後此會社漸次盛大にありもき今日に至りては其支社無數にあり世界中何れの國

にも傳道師と遣し與神の鴻恩と知らせ限りなく幸福と得せしむるに至れり

表に寫し出せる畜ハ今より大約十年前ウヰリアムス大學校のために平常盡力そる所の人多く同意し其前五人の若者ゞ協議せし彼枯草塚のありし地所一万二千坪と買求めて園囿と爲し稱して傳道社の園と云ふ抑是れ最初に傳道社と取結びさると永く人々に記念させんゞためなるべし此畜の碑と立たるところハ丁度枯草塚のありし所ろにて碑ハ蜘石にて刻み一方にハ創立者五人の姓名と彫りその上にハ枯草塚の形と造りまさ頂上にハ大いなる地球儀と置けり

此五人の男子ゞ未だ嘗て見ざる他國の民と救はんと斯く志と決めしハ如何にも大なる賢き働ならずや是彼等の主耶蘇基督と尊み主のさめに力と盡さんと思ひしことの懇切なるより斯くハありしものなるべし

今我國に多の傳道師と送るも皆前と同一の理にて聖書に記しさる故等萬國に行きて福音と傳へよとの聖言に從ひ彼等各幸福の音信と持來り我國民として昔く神の誡に從ひ善良の民となさしめんためなり

第十一　獄裡の撫子花

昔英國に幼き少女あり生得盲目なれば父母の顏ハさらなり照る日の光花の色だに見しらぬのみゝ三度の飯さへ買うぬる父も貧しく育てられ無學無識に人とあり傳に熟しことゝていと老さる家畜と驅立て處々方々と歷めぐるのみ畔と行きつゝ田と越つ足はぬ道具と袋に入れ肩に懸つゝ何所にまれ田舍農家尋ぬ行き其庖厨にハ入込みて己ゞ活業と求むるあり偖其業にあかつけゞ緣葉原野に家畜驅ふ人の始ハ善かちねと蕾の花に蔭ひあさ光色うるはしき花鶯笑ふかあれゞ引もあり何時か心も引かれつゝ自ゝら心の惡しきと知り我幸あきも是もあるぞと哀れ拙き心より何ゝ程よき活業もあらゞ善き生計ともして見さく常に心に願へども神の道とゞ能く知らねゞ神の力と藉れゞとて賤しく育ちし身の成果後に大家とあるべうと思ひ寄らぬぞうさてける

今日も活業と求めんと例の如く其處此處と徘徊ふうちも我心實に罪ふゝしと思ひつゝ或貧院の門前に來かゝる折しも此所に集ひし女の一群ハ是れ入院の貧婦にて何れも年ハ老されど金錢もおけれゞ人並の衣類も持ぬものあれど然も幸福の有樣あれゞ何ごと語合居るものゝ聞まはしゝと思ひしも己ゞ罪ひる平和と安慰如何に彼輩に得しものゝと心も足も勞れしまゝに幸ひ此處に憩はんと近寄聽けゞ婦女輩心に滿足そるものハ是れキリストの愛ありけり殊に彼輩の話しにハ金も價も入らゞこそ貧しくとても惡しくとも何の物ゝハ一向に唯請ひぬれゞ拯救の恩受得るものと聞ゝらに喜び勇みて疾足に其夜ハ我家に歸り來て婦と盲目の小女にきゝにしことと細々と語りきゝして偖々に最懇懃に祈れるハ貧しき老女の心根にキリストの住さまふごと我心にも臨給へと信心こめさる祈禱とて神速に聞召し親子の願と應へさせ忽ち平和と得てけれゞ價出さぬ報ぞと喜ぶ親父ハ此由と他人にも傳へきゝせねゞあらぬことゝハ思ひ立ける

程もあらせぞキリストの教へのぶる身とあれど貧しく賤しき悲しさに我等の普く學び知る

ペテロ、コバチの例の如くキリストもゑの仇あり て囚獄の裡に捕へられ妻子に離れ生得好める萬の物と棄て畫さへ暗き鎖の窓に月日と十二年送れる内に詮方なく只徒然に過しまろ否とよ此世にキリストの敎へ傳へ天國の道と知らそることなきねば曹と著して我精神に得さるよきこと殊に又彼貧院に居おがらも心幸おる婦人の美話罪人さへもキリストの愛にひろるまことのよし後々までも世の中に傳へ弘めて置べきうと心に定めしものおれば爭う猶豫れ あらざれど素より無學のものおれば如何にものせんやうもおし然れども神と共おれば如何おることも成るぞうし神の恩の靈智靈能おくてれ如何おる知識學者仮令智力と盡そとも天下の道と極むとも甲斐おき人が如何にして神の爲おる此業とおどう爲し得るものおらん

囚獄住居の其内に茲に一の樂みい手栽の盆の撫子の花の色さへ見分おき盲小女のヤリーが往來日毎に來てい良久しく語合ことのそれのみおりヤリーが囚獄に訪來るい抑何故と尋ぬれば既に前にも說へるが如く素より貧しき家おるに主が捕られし其留守い心細くも妻と子が靴紐織て朝夕の炊立んと計れども其靴紐の両端に金物つくるい捕虜の夫が手と借り漸くに母子が粗食の代求む活業おりせば小女い彼帽子に破れ衣細徑さどる細足の歩々に心附け徑の屈曲にイみて盲目の順風耳四邊の聲音聞分おがら囚獄へと通ふ千鳥の靴紐の籠に滿しと手に携へ運ぶい父の手と藉て金具附るさめおれば情知りさる看獄日々に見馴て何時とおく之と憐むものからに側に扣へし一連の鑰取出し戸と開き獄室内に小女の入ると許せば

ヤリーの喜びやるかさあさに父が手に抱かれぬれば看獄鑰と鎖に廻すにぞ暫時ゝ父子諸共に囚徒の姿とゝなりぬ

肯目女の哀さゝ父の顔こそ見えねども其慈愛の聲聞けば幼心に絲竹の調子の音ゝものゝはと毎に喜び嬉しみしが其にも勝る親心身ゝ囚虜にありあがら心嬉しく樂しげに喜び語りきりそれどヤリーが歸りし其跡ゝ涙に袖としぼりつゝ何ごとよりも女のさめ祈りしことの多りし然れば晝夜の別あく書く手にはあさぬ筆さへもヤリーが訪來し時ゝ何時限らず投棄て靴紐金具附る間ゝヤリーも囚獄とさのしみて提籃の用意と侍つうちに此室内の片隅に今咲匂ふ花の香のあるを覺りて聞くあれば親も獄裡の樂しみに開くと遲しと侍詫る其樂しみも神の恩侍に侍さる甲斐ありて今日こそ開く

花あれば父も惜きにあらねども女の歸りに持行けと許して遣りつゝ汝こそゝ獄の裡の我花あれ我と忘れぬ撫子あれと聞て女ゝ飛さつ喜び再三吻接し面に溢れし滿悅ゝ花と黃ひしのみあらぜ斯くまで優美しき名に呼べれ其愛みと思ひてあるべし

長き日に風も通さぬ鉄の窓に文あそ蜘蛛のいと巧ある紐織ゝ及ばぬ筆に勞れさる折に觸てゝ是も亦徒然草の一行肯目女ゝ一生涯見ることあらねど夫さへも父と慰さむ友ありと聞てゝあゝ〳〵あつゝしく今日蜘蛛ゝ何してゝと問てゝ無事と祝しけり其絲あらぬ靴紐の提籃携さへ然らばとよ別と告る其時ゝ毎も互に手をとりて歩みゝけつゝ折々ゝ伴ふことのかあはぬと女ゝつぶやくことあれど父ゝ毎々叱りつゝ今子が此處に居るゝ是神の意旨あるぞ我

女子ゝ何處にありとても神に事ふる身ゝ一恐らく異あることあしと聞て暫時ゝさしうつむき思案定めて顔ふりあげ父と囚獄に入れさる人今より忘れ侍らんと父に暇と立しより後ゝ再び此事と父子の間に語らざりけり

捕はれのうさてき身にしありあがら長き星霜おきやらで磯邊の松の小机に枝しはされて伸やらぬ腰とかゞめて書く文の側に備へし砂時計時と側らんさめあるに砂落果し其時にそれ打ゝへそさへ忘るゝまでに心とめてものしつゝ壁に向ひて眠と閉て回想せば世にありて今ゝ獄裡の花あらぬ我撫子も諸共に四方の野山の花笑ひ鳥の謳ふや虫の音も聞やるまでに世の中と思ひ出しゝ幾回かと餘所に想も哀あり此喜の音と讀さまひあん若子姫子遠き昔の此話まだ聞さまはぬも無理あらねど彼捕虜の著しゝ書の一ゝ讀さまへ夫ゝ昔より名も高き天路歴程と號けさる最面白き書ありけり抑其著述者ゝ誰あるかそれとも知召そまじがジョンバンヤンと云ふものあり囚獄のうちにあるうちゝ實に福音の說教もそることあらねど其間に心盡して著しゝ天路歴程ゝ世につさへ人ゝ死しても今も尙訓そるあり英吉利の語のあらん限にゝ後の世までも語そありバンヤン其書かきてより二百餘年にありぬれどそれと讀さる人々ゝ是まで既に幾百萬これより後に幾百萬千萬億の人々に後の世までも語あるべし是らの書と著述しゝ時ゝバンヤンいと貧しく之と發行して諸人之と讀み其愛顧と蒙りしゝ多年の後にありければ當時バンヤン教師ゝ既に今世の艱難と終り其妻と盲目の女もはや救主の住さまへる天國に往て又飢ることあく渴

けることあし又囚人にあらねゞ獄理にあらで常にひらける眞珠の門に入りキリスト信徒ハ光明のかゞやく聖徒に迎へられ美しき道にひられて登り逝ぬ

第十二　聖書の話

基督教と信ぜる方ハ必ず聖書のことに付て話と聞、さく思ひ玉ふべし因て今キリスト教の人〻ゞ如何にして聖書と持居るものありや語るべし抑聖書ハ諸君の聞及ばるゝ如く舊約ハヘブライ語新約ハギリシヤ語にて記しされば我等ハ之を讀むことあらざれば讀むことあらざるも尚無きが如く弘く人〻のやくにハさゝ然ば久しく前より志ある人〻英語の聖書と造らんと思ひさち初めて其志と遂げ英語の聖書と造りし人ハ有名あるジョン、ウヰクリフ氏にして今より凡五百年前の人あり然し其頃にハ木板活板共に未だ發明のあき時あれば皆一〻筆とも書記しさるものにてウヰクリフ譯それば弟子さち之と寫し夫より人〻の手に入りて其貴き言葉と讀むものも出來しあり然ば路傍に集り己ゞ本國の言葉にて讀める神の言葉と息と殺し熱心に聞くものあり是の如くあれば友より友に傳へ家より家に傳へ中にハ涙と以て濡されさる聖書もありしと又ハ孤燈の下に夜の更るとも知らざりしものありしとかや

又諸君ハロマ教會（ロマ教會とハ天主教とも云ひカトリックとも云ひ又舊教とも云ふ教會のことにて其僧侶ハ僧服と着多くハ手に聖書と持居れり）ゞウヰクリフ氏の業と妨害せしことも聞玉ひしあるべし其譯しさる聖書と讀むものあると見るときハ直に之と其教會より追ひ出

し又其人ゞ地面あり家畜あり貨物あり所有せるものゝ皆之と没収しさりと又他に悪事あく英語の聖書と讀みさるのみにて活あゞら燒殺されさるものありウヰクリフゞ爲しゝ事業とロマ教會にて忌嫌ひしことの甚しきゝ氏ゞ死して後久しく歴てより爲しゝことにても知るべし其死後四十四年と經て墓と發き腐れさる骨と スウフトと言へる所に持行き燒て灰と爲し河に流しさり嗚呼其恩枯骨に及ぶにあらせして其恨白骨に及ぶとゝ呉々も恐ろしきことあり ロマ教徒ゝ力と盡して其目的と遂んとせしもフヰクリフの志と繼て聖書の譯書と國中に頒布そるものゝ絶さることなかれゞ爲そこと皆畜餅に属そるにも係らせ彼等ゝ益〻其手術と巧にし捕へてゝ殺し捕へてゝ殺し或人ゝ隣人と聖書と讀みさる罪にて火刑に處せられ或人ゝ其子に英語ともて主の祈禱と十誡とと教へさる罪にて七人火中に投込まれさるともあり又此譯書と讀みさるさめに燒ゞれさる八十歳の老婆あり是の如き唯聖書と讀みさるのみにて殺されさるものゝ千と以て數ふる程ありしといへども善事ゝ肱力威力ともて支へることと得せ聖書と愛そる人々ゝ夜に入ると一ヶ所に集り一人讀みては多の人々聽聞し時としてゝ夜の明て日の照そも知らせ悦びて讀み居さることあり又其頃ゝ印行術の發明あき時も名聖書の價の貴きこと驚くべき程にて大金と持來りて買はんと言ふものあるも唯僅に新約書中の一部に過せ今は聖書の全部と買はんとそるに其價甚だ廉けれども其頃にゝ一人の職工ゞ十五年間の手間料と貯へざれば一冊と購ふことと得ざりしと以て其價の貴きと見るべし

偖又神の天命ゝ人に幸福と與ふものにて終に印行術の發明あり其發明あるや久しからせしてウヰリヤム、テンダル氏聖書と板行しさり此テンダルゝ或る貴族の師父さりしゞ曾てロマ教の一僧にむひ「余ゝ法王と其規律に敵それども若し神余に數年の生命と借し玉ひしあらば英國の牧童も聖書と知ること君に優るゝに至らん」と云ひしことありしゞ果して其言葉の如くありて今ゝ英國のみゝ遠き我日本の牛うつ童も草刈る賤の女も聖書と讀み得るに至れり閑話休題ウヰクリフゝロマ教の僧侶にせめられ英國にありて其業に從事そると得せ已と得せ荷蘭國に渡り盛に聖書と出版して本國に送りされゞ本國の人々ゝ之と悦びさりと云へども其業ゝウヰクリフの生命と失ふの原因とあり後に其隱家と發見され捕られて絞られ尚其上に死躰と燒かれさりと云ふ其殺さるゝ時願くゝ英國皇帝の眼と開き玉へ」と祈りしゞ其祈禱ゝ遠からせして應じ宗教改革起りて遂に英王も其理と發見そるに至れり

是より其後に成さる聖書のことと云はんにマイルス、カバティルの出版しさるあり「グレート、バイブル」と云るあり「ジェチバン、バイブル」と云あり又「ビショップ、バイブル」と云るあり其他數多あり又聖書につき英國王エドワルド六世と云る王の話あり此王ゞ位に即ける時英國佛國及びアイアランド三國の王として三の劍と與へられしゞ王ゝ其時「他に我受べき一劍あり」と仰られしゞ待臣等ゝ其意と悟らざりしと以て王ゝ重て「夫ゝ即ち聖經にして聖靈の劍あり此劍あらざれゞ我何事とも爲そと得せ」との玉ひしとゝや以て此王の聖書と愛し玉ひしと見るべし

又女王エリサベスが即位の時ロンドン府を過ぎ其禮を行ふ場所に至り玉ひしがチープサイドの住民之を祝し住民の惣代一冊の聖書を献じより女王い大に悦び受け接吻して之を抱へ住民に謝し屢之を讀み玉はん旨を詔し玉ひしが後太臣等に問ひ玉ふやう「朕位につけるの後未だ牢獄に繫がれて赦されざるものありや」と太臣等い對へて云ふやう臣等が知る所にてい馬太、馬可、路加、約翰及び保羅等云ふものありて放免せられんことを待つものあり」とエリサベスい其諷しさることを解し其國中に聖書の販賣等を自由に爲し玉ひしとぞ

今英國等に行はるゝ聖書の飜譯い二百七十年許前に成しものあり又一昨年い飜譯改正ありて譯語の誤謬等を改め穩當あらぬを正し更に正しきものを造りしが我國にも今い已に平假名雜り片假名雜り漢文、訓点、惣平假名、俗語ロマ字、肯人の讀ひべき凸字、木板、活板、銅板、和紙、摺、洋紙、摺、唐紙、摺等實に數ることのあらぬ程出來しより其他聖書のことにつき話しさきこともあれど余り長くある故此邊で終りとして又よき機會あらば話いさそべし然樣あら

第十三　耶蘇盲者といやそ

馬可傳八章廿三節以下に曰く「耶蘇瞽者の手を執て村の外へ携出其目に唾して手を彼に接問けるい何か視るや瞽者目を擧て曰けるい我此人々の歩行を見に樹の如し遂に耶蘇又両手を彼の目に接其目を擧させれば乃ち愈て庶物明に視さり耶蘇彼を其家に歸らせ曰けるい此村に入あれ且此村人にも告る勿れ

第十四　誰かの祖父

あゝジュリヤさん向ふから慨あ老爺が來さがねどたり面色とかへてエヤいジュリヤの手をとつて心配どうも皆が からかつて變大ざよと喚びつゝ走きらしき容子を爲し居さりジュリヤい驚ろき回顧せど來るものあければ眼に見るものい唯エヤの青菜の如き面色のみエヤさん何と見て來たのざへと云ひつゝ遙に後方を見れば一の老人破れ靴破れ衣に曲りさる杖を携さへ來かゝる後に多くの童兒從來り或い笑ひ或い囃けり見るも氣の毒ある有樣あるにエヤい恐れて遁んと云ふジュリヤいさゝて否々遁ていいけませんあゝあの童兒とは賢あさい老人とからかうのい卑怯でいあいがあれい誰かの祖父でもといと氣の毒に思ひ居るうちエヤいいつしか遁へり行き群がる童兒にうちむかひ大胆にも大聲あ去さりジュリヤい急ぎ老人の來かゝる方に歸へりげて云ひけるやう耻を知らぬも程がある何故老人を恐弄まもか若し此人が諸君等の祖父あらどうしまもかと云ひきられ少し閉口いしさものゝ負惜みをする童子等いジュリヤと笑ひ聲々に嘲

弄それば、ジュリヤン又も彼方に向ひ笑はば笑へ、私にハ痛痒ないと云へると聞て老人ハ珍らしき聲とさくものゝお私ハ盲人でどこのお方か分りませんわゝ否いと禮云ふとジュリヤンうちけし私でそよおまへさんハ多分道ゝ知れないのでお困りであらうと思ひまして私ゝお前さんの行く方へ伴共にまゐりませうと優しき童兒の言葉と聞き盲人ハ私ハ此地へ初めて來ましてさつぱり容子ゝ分りません私ハ此邑に居る女と訪ねるもので今朝疾く家と出ましゝゝ道とまちゝへて漸く今茲へまゐりましゝ童兒ハ私の足のたしゝであいのでお酔而て居ると思ふのでございませう何して君ハ然親切にあさるのでそかといへばジュリヤハ答てお前さんハ誰かの祖父でせう私ハ童子の惡戯と見かねまそかちお前さんの家まで送つてあげやうと思ひまそといと親切ある言葉ときゝ盲人ハ天と仰き神ハ必ず君に恩と與へ玉ふべしと云ひつゝジュリヤに手とひかれ徐々と進み行く悪き童子ハ後退より頻に嘲弄しゝりしゝ然りとてジュリヤの殊勝ある志にハ恥入りしゝ皆四離八散に蜘蛛の兒の逃ひ行く如く見えまありぬジュリヤハ親切に盲人の手と引て道の凸凹屈曲と激へ導き盲人の女の家に連て行く斯くまでジュリヤゝ盲人に親切あるハ己の家に祖父住ひ居て老さる人にハ若き人の助くることの必要あると よく知りさる故ありとぞ然ば老さる人と見る毎に其貧富にハかゝはらず必ず助けて己の家の祖父と悦ばせようとやさて我國の童子と見るに兎角惡戯として人の迷惑と己の樂とし盲人の杖ととりあげ隣町の童子と苦しめあどそるものあり實に此ジュリヤ

の親切ある行爲にハ恥べきあり若し人老人と見るとき之も誰かの祖父あるべしと思ひしあちゝ親切に爲るとも決して惡戯あどとゝ爲し得ざるべし之と讀む童男女よくれ〳〵も分憂の情ともて老人貧者と隣み玉へキリストハ我名のために此小き一人に行へることハ即ち我に行へるありと云ひ玉ひしと記ねよとまうそ

第十五　眞珠商賈

眞珠ハ美しき寶珠にして粧飾に用ゐて價値あるものあり色ハ青白く光澤ありて大概ハその形圓し眞珠ハ眞珠牡蠣と云ふ貝のうちにあるものにて最も多とれるハ印度のシーロン島の海あり此蠣ハ二十尋ぐらいの海底にあり捕る人々ハ船にのりて七八里ぐらゐの沖に漕出し水に沈むに器械あどと用ゐ脚に大石と縛りつけ繩ともて沈み眞珠牡蠣とり囊に入れいよ〳〵息のつゞかぬ時にありて脚の石とぴりそて水上に浮み出るあり暫く呼吸とはかり又泳りいる其樣ハ我國の鮑とりあどに類せり牡蠣とりてみさる船ハ海岸に戻りて來りて必ず用ゐ眞珠とさがしとるあり是より眞珠商のことと語るべし

天よく晴さる夕暮に商隊と名付る商人の群れ西紅海の海岸にある邑に行列と爲して入り來り人々ハ又此商隊の入り來ると見て市場の盛あると悦び眞珠と賣ちんとする者ハ鑑と敷て眞珠とあらべ夜店とはじむ買ふものハ彼方此方と見あるきて必にかあふものと見て各購ひ求む其中に一人の商人あり輕々しくハ眞珠と買はず格別の眞珠と發見して利益と得んものと普通のものハ手にもとらず遂に一人の店に來り一と手にとりにて〳〵しあがらもハ此眞

珠は何程ありやと問ふ賣人はまき人來れりと思ひ「此眞珠は通常の價に超さるものにて君と尊敬するが故に余は手離さゞり一百タレント」にて賣渡し申さべし」と云ひしが「十八万八千一百十弗にあたる金高にあたれり」商人は之を買ひさく思へども大金のことなれば己の騎馬や其他持物を賣拂ひて直に賣人に來りて其眞珠を買ひさりと見る人々のうちには此商人は狂氣にあらしかなど云ふものもありしが眞珠を買はんとて來りし人々は皆各ある都府に歸りさるに此はき眞珠を買ひさる商人は騎馬や其賣拂ひされば後にこそ大利潤あらめと膝栗毛に乘りはしりして同じく都府に行きたり商人は國王の住せる都會に來り荷物をひらきて見れば白い如何に微塵に碎けさるもあり又は光澤を失ひて礫の如くありしもあれば大に仰天し失望して商人等に歎かれしを悔いさるに眞のよきものと買ひたる商人は國王の御意に入りて思ひぞ大利を得さりとかや人々は彼はかしこくも善きものを擇みて價値ある眞珠を買ひさりといへり偖右の話は譬喩にして人の有樣を示そのあり余輩は各眞珠を買はんとしてさがし求むる者あり其眞珠とは則眞の幸福あり或人は世の富をもて之を買はむとそれども夫は微塵に碎るとあり或人は罪の樂をもて幸福を得むとそれども久しからずして亡び此の如き幸福は眞に價あるものにはあらず持主を悅ばそに足らず其光澤を失ふて持主に失望さすることあり然し茲に價のわからぬ最上の眞珠あり凡の人に來り求めむことを欲そのあり其眞珠は主イエス（キリスト）にはもて得らるは價あき救あり神は人を聖く造り給し

々罪と犯して今日の子孫ハ皆罪の性質ありて世に生れ自から救ふと得ぜ神ハ大なる愛によりて余輩の代に死せしめむとして愛子と世に下し其子ハ人と爲りて三十三年の間世にあり人に教へんがために義と行ひ十字架に死し人々の罪とわがあひ三日にして蘇り久しくして遂に天に上り今救世主とあがめられ凡て己と呼び求むるものと助けむとして待玉へり余輩若しキリストと信じキリストと避場とおしさらむにハ余輩ハ靈の救と云ふ價格ある眞珠と得ること明あり商人ハ眞珠と買ひされども余輩ハ之と買ふことハあらぜ神の救ハ價なき賜にして金おく價おく與へらるゝものあり余輩信じてイエス、キリストと見謙遜して祈り求むるあらば其報ハ余輩のものあり然れども時としてハ余輩の持物と皆賣拂はねばあらぬことあり又罪のことハ凡て棄ざると得ぜ人々辛抱し己に克て水中に浸り眞珠と求むるが如く救拯と求めざると得ざるあり此眞珠ハ永遠まで也失はるゝことハあく決して世のものとも比較そべきものにハあらぜ偖死おんとそる人ハ生命の永續せむさめにハ凡此世の眞珠とハ悅て棄るあるべし然るにイエス、キリストと己の業として得さる者ハキリストの中に富と見出し其富ハ衰ることおく暗くあることおく價と減ぜるとハあらざるあり又此眞珠ハ非常に大なる價ありて世と去るときも携ることと得るあり決して世の財寶ともてくらぶると得ざるあり蓋し余輩ハこの世に何物とも持ち來らざりしとも何も持行くことのあらざるハ明あり最とも富さるものも神に對してハ富あらぜ死そるときハ貧し諸君よ此眞珠とえらみて

とり玉へ夫ハ決して諸君と去ることあく後の世迄もとり得るものあり今之とさまさぐる者ハ去りて永遠にかゞやきひかるあり

第十六　幼き籠師

英國の寒村に至て貧しく暮そ三人の一家族あり夫ハタムメレーと云ふ兄と妹に叔母の某あり此兄妹の父ゞ世にありしときハ籠師として渡世とせしゞ富にもあらねどさりとて不自由もおく暮しさり妻にハ溥命にも先だゝれ種々不幸のうち續き己も今ハ病臥に伏し最早此世の望も果しゝゞ一日其妹即ち此兄妹の叔母と枕邊近く招き寄せ頼む言葉も力おく汝の介抱息おけれど斯くまで勞れ果されゞ最早臨終に間もあるまじ死して行く身ハとしまねど後に殘し子供等と思へゞいとゞ胸せまり心憂くこそ思ふおれたゞ頼母しきハ汝のみ願ハハ今より我身に代り子供の養育頼むぞゝしタムゞ成長の後々ハ我職と襲ぎ籠細工をと云ふと此世の名殘にて眠るゞ如く死しさりとゝやされゞ妹の某ハ絶も入るべく歎きしゞ兄の遺言の重けれゞ二人の子供と樂みに養育怠りあゝりしゞ際もく駒のいと速くタムハ十年にありし頃父に職業とうけつぎて日々叔母の傍に籠細工とぞ初めける一日叔母ハタムの傍にありて針仕事と爲し居さりしゞタムに云ふやう汝ハ常に勉強して籠細工と怠らねゞ籠につきての昔話と聞ゝそべし「そも〳〵籠ハ何時ごろに誰ゞ造り初めしゝ分らねど我讀みし古書のうちに見えさる籠の事ハ汝ゞ能く知る聖書の首卷創世記のうちにしてパロ王の膳夫ハ白き籠に食と滿したるゝ夢み又モーセの母ハ殘酷おる王の命令によりて余義おく愛子モーセと河

に沈そとき自ら葦と以て籠と造り其中に入れて流じよゞ神の德あるものと見棄玉はゞ直ちに其子の王の皇女に拾はれ無此上幸福の身となりて遂にイスラエルの民の苦界と救ひさりゝ然べこそモーセの母の其以前籠と作り覺してとと悅び神に數度感謝せしとゞ今此二の話によりて籠の大古よりありしものあることゝ明あり然べゝよ汝の今より耐忍びて其職業とつとむべし世の人々の汝と見て賤しき籠師と云ひもせんされど望と失はゞまゝ〳〵勵みてよくせよゝし假令其身の貴き官職ありとても其心樣賤しくべ神の憐み玉ふまじ今より汝の心にかけ私慾とそてゝ隣人と自己の如く愛しみ父の職業と勵みおべ父に優りて其業の名聲と共に高くして世にも人にも益あらめと最親切ある叔母の言葉にゝ嬉しさ哀しさに落る涙とせきあへゞ坐に袖と絞りけり夫よりゝ一層職業と勉強し只管之と勵み叔母に事へることゝ親の如く妹と愛して世人に賞めさへられ末親母じくゞ思はれけり

第十七　磐石

夫れ磐石の德さるや砂の如く流れゞ逆浪怒濤にあてらるゝも依然として變らゞ然べ磐石たるや陸にあつてゝ大厦高樓の基とおるべく海濱にありてゝ堅固おる燈臺の礎とおるべし故に我主エスキリストゝ其言葉と聞て守るものと磐石の上に家とたてさる賢こき人に譬へたゞゞ彼燈臺おるものゝ航海者の便利と謀りて岬又ゝ湊の口おゞに立るものおるゞ時としてゝ海中の一大磐石の上に立たるものあり東京灣と出て上方に向はんとする船ゝ燈臺のさゞけと受ることゝくおゝらゞ横濱と出れ

べ觀音崎松輪城ゞ島夫より西にむゞひて進み行けゞ伊豆の南端神子本島の燈臺あり遠州灘と終れゞ紀州大島に燈臺あり紀州と旋りて北に向へゞ苦ゞ島の燈臺あり是の如く行く所として燈臺のあらざることおきい實に航海者のために幸福あることにして航海者の生命とも、云ふべきあり而して其燈臺い如何ある所に立

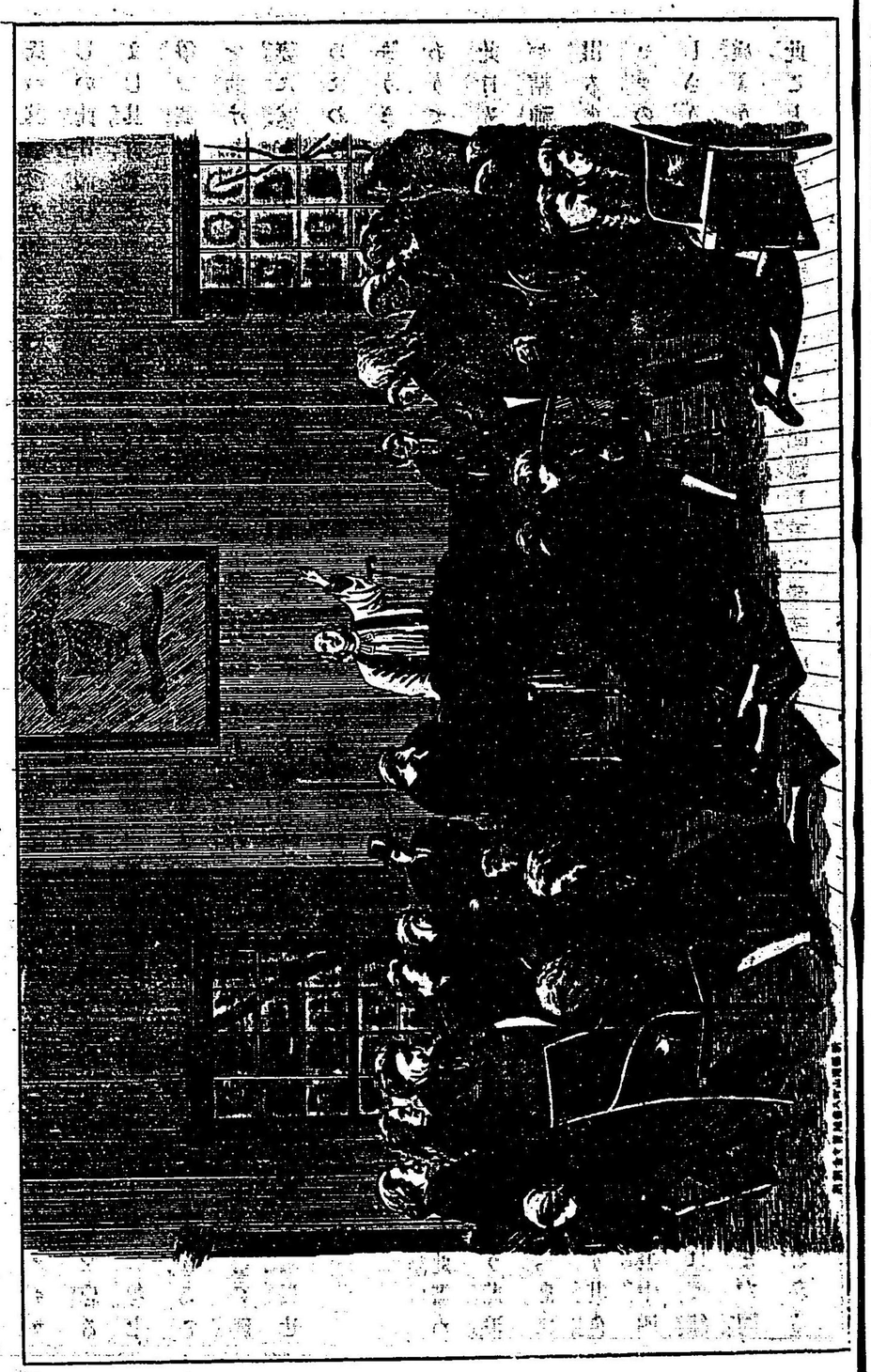
るやとあれゞ皆磐石と基礎とおしさるものにて堅固此上もおきものあり燈臺い多く煉瓦の如きものにて造るものあれども非常に細く長きもの故若し其基ゞ堅固あらざれゞ決して燈と守る番人ゞ家に居る如く安心して居ることいあらぬものあり然べ磐石い是の如く堅固あるものもゑ聖書の中にも神と磐石に譬へたるとあり ダビデ曰く我主の他に磐石さる者い誰ぞやと蓋し神い大磐石の如く動ゞ也變也太古も今も眞あれゞあり嗚呼世の風波に漂はさるゝ者又江湖の暗路に迷ふ人よキリストある大磐石の上に立さる眞の光に路と照され安心して世と渡ると好ざるや

第十八　合衆國議院の祈禱

茲に寫し出を黄いアメリカ合衆國革命の大戰爭前即ち一千七百七十四年(我安永三年)にして今より百十一年前(九月五日アメリカ人初めて議院に代議士と集めさる時の模樣あり此人々ゞ集りさる家い彼の「インデペンデント、ホール」と稱して其後屬國會の議場とおりさるものにいわらざれども「カーペンターズ、ホール」と云ひて高名ある建物へあり今倘フヰラデルフヰア府の三

番町と四番町の間にて栗實町の南側より曲りさる横町の奥にありさて此畜と見るにつけて我等の考ふべきこと二あり一い此會議に集りさる人のこと又一い此人々の恐のうちの有樣あり先初めに其人のことより話とはじむべし當時米國い今の如く其國々の數も多からゞ僅に十三州ありしゞジョージャの他い皆夫々代議士と出しさり其中にてマサチューセッツ州より出さるサミューエル、アダムスヴァージニヤより出さるジョージ、ワシントンあどい殊に高名ある人々ありワシントンいポトマク河の傍にあるマウント、ヴァーノンの家と出る時高名のパトリゾ、ヘンリー又エドマント、ペンドルトンと共に出立せしが其頃い蒸瀾船もおく蒸瀾車もおく乘合馬車あどの設もあらざれゞ皆馬に乘りてヴァージニヤよりフヰラデルフヰアまで互に語りあひつゝ出來りしゞ皆心のうちにい雷てアメリカ國にい見しことも聞き驚要おることと議し其國の平和幸福と謀らんさめに一の政府と設立せんとの見込あれゞ其旅こそ晴にもあり心の中にい大おる悅ありしものと察せらる然しあゞら其前途にいいろ〳〵困難のこともあるべく又い危きこともあるべしと思へゞ途中それらのことにつき種々互に意見ととりかはし相談とそることもありしおるべし若し其傍にありて此長途に語りあひしことと聞さらんにい旅の難義も忘れ果て聽ひ行くと得しおらんさて又フヰラデルフヰアに着しさる時い名のみ聞ねて初めて逢ひし人もあるべく兼々懇意にせし人もあり又名と聞くも初めての人もあるべく此人々皆カーペンターズ、ホール」に集りさるおり是より其人々の心の中の有樣と語らんに

其心の中に滿さるゝ愛國心と名付るものにて其國と慕ひ愛そるの心あり此人々ゝ己の生國のさめにゝ是の如く集りて事と議しさることあどあるべきゞ全國のさめに集りさるゝ初て あり然ゞ多の人々のうちにゝ如何あることとも爲してよきや知らざる人もありしあらんゞ國と愛そる心に於てゝ甲乙あく皆何れも盛なる人々あり去りあゞら又其中にゝ己の生國のことと深く考るものもあれゞパトリクヘンリーゝ得意の能弁とふるひてアメリカ全國のさめに利益と謀るべきことと演説せしゞ其演説のうちに我等ゝヴァージニヤ人にあらぜニューヨーク人にあらぜニューイングランド人にあらぜ余ゝ今已にヴァージニヤ人にあらぜして一個のアメリカ人ありと云ひさりと實に愛國心とゝ利己心にあらぜ偏頗心にあらぜ公明正大のものあれゞ斯くありさきことあり若し我等にして此アメリカ人の如くあらんにゝ我國の安寧幸福と得るゝ敢て難きにあらざるべし此人々ゝ愛國心に富さる人々ありしゞ又神と敬ふ心に富さる人にて或る人の發議にて議事と開く前にゝ必ぜ神の助と願ふの祈禱と爲そべしとの議ありしゞ又宗教のことについてゝ各意見の異なる所もあれゞ到底一致そることゝあらざるべしとの反對説もありしゞサミュエルアダムスゝ若し善真のキリスト信徒として祈禱あさしむるあらゞ余ゝ悦て之に同意をべしと遂に「エピスコポ」教會の教師ダッチと云へる人と招きて毎朝の祈禱と頼みさり然るに此時英國との困難ゝ其極度に達し翌朝議事と初めんとそる前英兵ボストン府と攻撃しさりとの報知ありたれゞ代議士の精神大に激動しダッチ



氏い其教會の朝の祈禱と終りて此議場に來りしか此日讀むべき詩篇い三十五篇にして恰もよし其言葉に「エホバよ願くゞ我に爭ふものと爭ひ我に戰ふものと戰ひ干と楯とをとりて我を助けよ」と云ふ所あり、しがアダムス氏が其後妻に送りさる書信のうちに其詩い其機會のさめにわざ〳〵書記しさるものかと思ふばかりありきと云り「エピスコポ教會にてい祈禱の書ありて日々祈禱べきことの定めありダッチ氏い此日も例の通り祈禱の書と開て祈禱と初めしが精神大に加はりて遂にい其書ととぢ心より出るまゝに禱り殊にボストン府の爲マサチューセッのさめまさ國會のさめ全國の爲に祈禱爲しさりと此當にある所い即ちダッチ氏が心の底より眞情と吐露て祈禱と爲し居る所あり此ことと讀玉ふ諸君いよく記憶し玉へ愛國心にい敬虔の心供はれざれゞ甚危し又アメリカ合衆國の政府い祈禱ともて初めさる事と忘るべからさ敬虔あき愛國心い屬利己主義に變じ神と信さる公の心あき時い偏頗の心とあることあり謹むべし聖詩に曰く「神い即ち我等の神にして我等と祝福せん地の極悉く之と敬畏せん」詩六十七、六、七と

第十九　フィンガルの洞

茲に一圖と加へて天然の奇觀と示さん此書い表題にかゝげたるが如くフィンガル洞あり此洞い大英國スコットランドの西海岸のスタファ島にありて鎔化石の柱石にて成さるものあり其色い暗藍色にて柱い五角と六角あれども其中四角と八角のものあり太さもいろ〳〵にて細きい一尺太きい五尺ぐらゐにて其長もまた同じからさ然し其柱い短き石が重りて柱とあるものにて不思議あることにい下の石の上い凹にて上の石の下い凸にて互にはめこみさるゞ如くして重れり元來スタファ島い柱狀の鎔化石又い緣石にて成りさる島にて至る所其石のあらざるかあし其洞い南とむき左右の柱石は長きものにて上い其破碎れさる石集りて目鏡橋の如く大半裸石あり磯うつ波い晝夜絶間あく洞のうちに響きわさりて恰ら樂と奏そるゞ如くあれがガル（種族の名）の名にてい之と音樂洞と云ふ一千七百七十二年にサー、ジョセフ、バンクス氏此洞と見物せしが音樂洞の名の空しからぬと感じ其名と改さむることと爲さゞ倩てフィンガルと云ふ名は古コルマックとしてアイアランドの王位につかしめんとしてローマの太子カラカラと戰かひさる勇士の名あり此の洞ゞ其名ともて呼べるよいフィンガルが此洞にて何か行ひたることあどありて此名と負ひたるものか今とありてい考ふべからさ然れども磯うつ波の音ときゝ殊に嵐そる日に音ときかゞ是く大ある海の音樂い他に決してあらぬ所ありと感そるもの高名あるフィンガルの名と負せさる雅致あるや知べからさ何れにしても古より風雅と好む人々の見物して詩と賦し歌と詠さるあどと見れゞ天然の奇觀たること疑ひあし此洞と見物せんとそるものい舟にて其内にいるべし洞の高い六丈許にして幅四丈二尺あり内部の両側に斷石と爲しさる如き凸凹の道ありて一人立往來と爲そべしされど凸凹極りあきともて深く心と用ゐざれゞ危し馴さ人い好き天氣にて波のあき時い東側と洞の突當まで行くと得べしといへども實危き所爲にて果そことのあらぬことあるは度々あり風あく波の平

東京知新堂調製

ある日に舟を浮べて洞のうちに入らゞ其觀の奇にして美なるゝ驚かぬものなく見渡せゞ疊々たる岩石の床ゝ頭上に掛り滴々せる波涙の光ゝ船側に碎く冷氣侵し來つて俄に冬と來らしたるゞ如く群鳥翔り立つて忽ち雪と降らそるに似より近く聞くものゝ洞口天然の樂にして遠く見るものゝ海中アイヲナ島あり蓋し畜工ゝ筆を投じ歌人ゝ腰をぬかし讃嘆稱美してやまざるゝ此洞あり洞の眞正面に遠く一島を見る之アイヲナ島にして今より一千三百年程前聖コロンバと云有名の觀音者ゞ勞動又祈禱を爲しさる所あり當時此島ゝ歐洲諸學の本地にして歐洲諸學の基ゝ此島に立たりと云も過稱にあらざるあり然し當今ゝ甚衰微して見べきものあし或る人いへることあり曾て學術敬虔の首府たりしアイヲナゝ今ゝ教育のために備へられさる學校あく禮拜のさめに設けられさる寺院あし英語の通ぜるものゝ二種族のみにして讀書と爲し得るものゝ一もあし「ドクトル」ジョンソンゝ世の變革によりてゝアイヲナゞ西邦の女師たらんも亦知るべからぜと云へり又島人の意思にも其ことありて何れの日か再び起りて古に復らんと云ふものあり蓋し其意思ゝ聖コロンバゞ作れりと云ふ古詩の句に基くものあるべしと思ゝるるあり

因に云ふ是の如き洞穴ゝ我國にもあり但馬國城崎郡豐岡の近傍にありて玄武洞と名付く古ゝ何と云ふ名ありしや知ざれども芝栗山氏ゞ其洞中に玄武洞の三字を題してより人々其名を稱そるに至れり之とフキンガル洞にくらぶれゞ稍小く弟あれども景色ゝ頗る佳あり柱石ゝ五角あり八角あり太七寸よ

り二尺五寸ぐらゐにて一様あらぎ色ンッガルの柱石に似て其質ン堅からぎ軟かあらぎ磨けバ光澤ありて碑と爲そべし偖洞中に入りて仰ぎ見れバ柱石の其側面とあらはしあるン恰も握飯と重箱につめて倒にさげさるダ如し又柱石の斜に向ふ所ン蜿蜒さる一字形と爲して蛟龍腹部とあらはして天に朝そるダ如くとでも云ふべく實に奇觀中の奇觀あり

ッガルの兄ン老人と見ゐて兀頭あれども玄武の弟ン兀頭にあらぎ其上に竹と生じ其間より水流れいでゝ瀑布の如く落つ又此石脈に温泉湧出そといへバ行旅のついでに行て見さまへ余ン未ダ之と見ざれど其地の中井甚治郎氏ダ心切に書き送られされバ並せて記そものあり

第廿　乙女の善行

屬さす寒もいとゞ冬の末夜ぎかねさる蟋蟀のくらし二人の子女と此上あくも頼みし甲斐のありてかや兄のジャックン先つ頃鉄道會社の機關士に雇はれけれバ朝夕に通ひ慣さる鉄道も日々の生計の山坂も何の障碍もあきものから母のよろこびいかばかり殊にやさしき妹のケーテー己が住家に程近き河邊に高き橋臺に架渡しさる鉄道橋汽車の越し來る其時に兄の無事ある顔見ささ路次の泥濘ンものともせぎ母の許と得しまゝに今日も待居て逢あんと出行く空ン晴されど近頃稀ある大雨の三日三夜も降りつゞき折も折とも冬の日の日脚みじかき夕五時頃橋邊の木蔭に彳て今やおそしと待程に日暮に近くありぬれぎ兄の見えねバ歸りも得

ぎ遲くありあバ母御にも嘸ゝし淋しく待詫あんと思案あがらも木根に坐り渦まく流れと見てけれン勢ひさあダら龍虎の戰ひ飛ダ如く嚙るダ如く怒るダ如き有様といと恐ろしくも見る影の橋の眼鏡と突く氷の玉散る涙ンとかしくも又面白さに心奪はれ更に餘念ンありけり知らぬ乙女ン然もありあん世故に長さる人人ン抑も此橋ン其はじめ建築よからぬのみあらぎはや老朽てありけれバ試驗やせんゝ新橋と架替あんかとぎちくの評議中にてありしとかや

日ン西山に落入て後の明のいと短ゝく頓て暮あん烏玉の夜も程近くありぬれバケーテーも今ン待わびて汽車ンまだかや兄上ンまだ見えませぬかと延上り遙むかふと眺むれバ待し甲斐ありゝそゝにも來ゝる汽車の見えけれバ頓て橋邊に來ぬらんとケーテーン立て小躍し手巾振つゝ出迎へバ兼て知りさる合圖あり夫と見るより兄ジャック同じく記號の答と爲し年十五の我妹いつも變らぎ大木の下に待居ることあるかと漸く近く來る程に鉄鋼に身と固めし奇怪の物の這來る如く昔語の變化物かと疑はるゝも無理あらぎケーテーダ眼にて見るとさン彼大ある器械とバ動かそものン眼に見えで自から動く變化物の積々數も歩み來て呼吸ン生とし活るものつくと少しも違はねバ訝かしく又おかしくも見えにけり殊に此汽車ン兄ジャックダ引ものゝらいとゞ樂しく思ひつゝ脇眼もふらぎ近づくと待居ることゞ道理あれ

汽車いよゝ近づきて橋の虎口にかゝりしときあゝ神よ是ン何事ぞ抑も何事の出來さるぞ材木泥塗一聲に落さる響きと聞くと等しく

鉄鋼よろひさる彼怪物の首さへ河の此方の岸邊なる氷の淺瀬に突落されどつと一聲きゝしまゝ後ゝ響もなかりしがケテーゝ眼と拭つゝ夢の覺さる心地して餘りのことに驚きつ實のことゝゝ思はれぞ唯忙然と立さりしが頓て心もつきされば聲と限りに叫びさてジャックジャッシと呼はりつゝ險しき岸を這ひ下りて泥土石灰石材木落たる中に倒れさる瀧車の方にゝ向ひしが物に躓き倒け轉び進みゐねさる足下に競持垣の落さるに中りてあらん唯今死にさる火夫の屍にはつと驚き後じさりいよ〳〵怖さ恐ろしさに足もしどろに踏止めぞ頭も足もぶるぶると震ひ慄くばかりなり然りとて行ゐねば同胞の兄に逢ゐん術なければあへぎ〳〵て破れにし機關の下に近よりてジャックジャックと呼はゞて何處に在そと尋ぬれば痛みに弱りしふるへ聲なれどジャックの聲として一言應聲のありしよりケテーの嬉しさやるかさなしジャックも聲と應ましてケテーよ予ゝ爰にあり機關のうちにあるなれど此大石に痛められ詮術なけれど其許ばかよわき力に及ばねば揚んとそるも無益なりウリヤムスゝ何處ぞと問はれてケテーゝしやくりあげウリヤムスゝ死しされば妾ゝ是より助人と迎へて來ゐん待玉へといへばジャックも合点て然なり然なりよくも心づきしぞ我脚の上なる此おもみ恐ろしけれど是天よケテー來て見よ我と見よ爾勇健なるか心とさしゐにもち居れよ余が眩暈そる鉄道も像て其方ゝ蹉慣さりといひつゝジャックゝ力をつけ打身に惱みし身体と片臂つきて持上つゝケテーよ三百人の生靈と助くるものゝ爾なるぞ今より半時間にして別仕立の瀧車こゝに來ちん

急き此事を報知せば又もや茲に陷りゐん電信局ゝ町近にて此處より遙に遠けれど橋の桁木に攀登り彼方の岸に渡ゐ、ゐ孩車場まで駆つ付て後の車ゝ彼所にて止めしひべき間に合ゐべし疾く〳〵報知べし我身ゝ此大石に押つられ動くこと能ぞあらねども必ずや氣遣ひしさまふ夫まで待つてといとやさしはやうはやうとせきさてられケテしゝ上と見ゐくれゝ破れし橋ゝ高けれど機關に登れば屈なんと思へど河幅三四丁迅き流れの水深く怒も恐ろしく見もれども桁木さひに這ひあがる身ゝさゐ故に小乙女の畫の最中も恐ろしく危うき橋に取つかん時なとき夜の闇ゐやめもわゐぬ暗がりに目に凄きるゝ大空の星の光りと瀧川に玉散る涙の光のみ斷る危難と憶せぞ渡り初

さる凄じさ其强勇の壯夫に優りしことゞ目覺しき

此方にジャックの聲張上げ我神よ三百の人民腑に死あんとて誰一人も之と助くるものあしといへゞケテーの大息つき妾助けん行て來まそ行て來まそゞよジャック兄と聞てジャックも力と添へ妹出來しゝ我妹早く行きやれ此身とゞ決して氣遣ひしやるおよ諸人の生命助あり諸人の歎と救ふあり恐れ慄くことゝ勿れ下の氷とあの思ひおせそ神の爾と守りあん予の爾と氣づかはせ氣遣ふ心更におしと實にもジャックの信心の天父の愛護と熱心に信仰それゞ妹ゝ荒れ破れさる橋桁と傳ひ〳〵に這ひ登るも心に氣遣ひせざりしあり然どジャックの烏玉の晴夜と照そ星影に妹の俯そかし見て我身の痛と顧みゞ不幸に罹りて大勢の人の命とひきうけて心細くゞゝ小妹の助と待ひそ傳おる

斯てケテーの心と定め兄の願め一事といざや仕遂んものゝはと踏へし足下きゝて見て見分かねさる桁木とうゝひ切に心の用ゝられど咫尺も分らぬ橋おゝゝ一足つまゝき踏外し瀧おそ流の河中におわゝや落んとしゝられども辛くも足と踏止めしの流石に猛き兵卒も功名手柄の何かせん慄くも勇ひも申聖おきいくさ逃ねゞおちぬ落武者の不憂とうゝれしばかりおりゝよわきケテーの大材とじつかと執へて忍びおき頭の冷さき鉄道に觸さる折しもジャックの聲にひゞきて我神よ三百人の人々の今や死あんに助おしと云ふにケテーの心と勵ゝし眞の暗路の横桁と手に執り膝に踏へつゝ最早驚くことおしと這ふ〳〵橋と渡り越え彼方に立しときケテーゞ心に思ふやうジャックに別れて其後にはや一時の過ぎさちんと思ひそゞせど其實の僅に二十分ばかりにて此處につきしのさふとくも實に神の加護あり

漸くケテーの大息つき夫より直に大いそぎ河の後ある停車場そこしもはやく知らさゞやと急せき走りつきにける此處の小さき立場にて帶に止めぬ瀧車あれゞ向のかさより飛ぶ如く駛りくるまも知るあれゞ此處にて瀧車とゝめぬゞ必ず大事に至らんにケテーゞ此處につくとひとしく遙に炎とひらめかし速くも瀧車の地響とケテーのきゝてあわさゞしく夫とゝゝゝめは瀧車止めよ橋の落さりそれ止めよそれと止よと止よと云ふ聲きゝて驛長の事の樣子と尋ぬんとあわてふゝめき躍りいで此方に馳せ來る有樣と見るよりケテーの猶豫あく報雜燈と名づけさる危難の合圖の燈おつとり道の央に走りいで彼方此方と打振れゞ來かさる瀧車も應の合圖おしつゝ此處に止めんと用意しされゞ急おく瀧車の此處にて止めさりゝ

爰にケテーと見知りさる肝煎役人出來り是の何故ぞ何事ぞと問ふに答へて云ひけるの橋の落さり今のまへ過にし瀧車の彼河の向の岸に覆りジャック夫に乘り居れど橋より落じ大石に打狹まれて動き得ぜ然ど自身のさめおらぜ瀧車乘客ゞ助けんとて妾ゞ遣そものぞうし彼處にジャック一人おり早う誰おと小舟にて助けにやりて給びさまへゝうぞ〳〵と云ひけれゞして又其方にの如何にしてよくも此處への來しものぞ如何に小女と尋ぬれゞ橋桁ゝさひに橋越て道もやう〳〵手と膝に這ふ〳〵此處への來つるおれわゝやジャックの助人とぞうぞ送りてさまれれと心急ぐも道理おり

時に車の乗客ハ乙女の健勇に九死と救はれ一生を得んことハ神あらぬ身のいろで知るべき隔の河の水面に浮ぶ小舟にうちのりてよき舟子に漕ぎせ私心更にあきジックと早く救ひ出し機闘の破製に怪我させじと一応不亂に來て見れバ其片脚に傷つけられ劇しき痛と見もれども三百人の貴き生命乗せる滝車の助かりしとジックハ此上あく喜ぶものから我身の痛を忘れけり

偖乗客の其中にケテ|ジックの骨折に報もとハ云ふにハ足らねども聊寸志のしるゝとて數多の黄金を二人に贈り謝詞を述るもありけれど私ごとゝ更にあく人の爲として我痛能くも堪にし身の耐忍丈夫に勝りて撓みあき乙女の勇氣雖ありて憂ぬものあき敢爲の勳功如何で此儘埋むべき鉄道會社ハ此度のジックの爲業凡常の機闘士あゞにあらゞとて專門學にいれけれバジックハ此に高等の學科を卒りて其後ハ鉄道橋架の建築を家業と爲して暮しゝ今ハ豊かに富み榮え目出度身とハありにけり又ケテ|にハ乗客より貰ひ得さりし五百圓又其外に一千圓合せて一千五百圓ケテ|の名にて銀行に振込手形と渡されさり

第廿一　賢愚の山羊

ある所に二疋の山羊あり一つ牧場に飼はれてありしに二疋連立て旅とはじめさり然し都合によりて一疋ハ右の道と行き一疋ハ左の道と行きたん〳〵旅しさる所が不圖桑川の丸木橋にて左右より撞見しさり然し此二疋の山羊ハ狭き橋にて遣と腹るゝとゝ好まゞ互に我勝に渡らんとそる傲慢の心より來かゝる山羊にむかひて云やう君に此橋を渡るの權あらゞ余にハ亦其權ありとゝ之ときゝて一疋の山羊ハ答へ余にも亦あり之ハ知せゞ否〳〵君の有る權理ハ余に屋もとゝめゞ押流されて行衛が知ちゞあり互に云ひつのりていつ果べしとも見えさりけり稍暫しして双方の山羊ハ議論にそれとても退付ず此上ハ腕力否足力に訴ふべしと左右よりゞかく〳〵と詰寄て我こそ先に渡りゞ見せんと云はゞ餘地さへおけれバ行ぐゝと見ゆ此二疋の山羊ハ物の見事に轉落ち白波さとさる急流に屍もとゞめゞ押流されて行衛が知ちゞあり

けり然るに此愚なる山羊に反じて他に又二疋の山羊あり之ゞ同じく旅立して寓西南北と周遊るうち先の山羊の出會し如く狭き橋にて行合ひし分此二疋ハ互に先を爭ふ如き愚あゞ

場所もあし爭ふことを好まねば一疋の山羊の橋の上に制御じて先より來りし一疋に自己の上を踏越させより斯く互に睦しく親切あれば朋友の上をふみ行くとも氣をつけて痛のあきやうに爲しゝとの疑あし賢こく温和なる人の幸福に暮し居るに爭と好び人の常も不幸の生活とせねばならぬものあり

第廿二　善良の牧者

我日本國にても羊を牧ふことを稱あれば牧者の辛苦勞力を知るもの少しアビヤ洲の西又の國洲の諸國にても大都會に住まぬ童男女の曾熟知ることあり實に牧者の心配の容易あらぬこと、にて羊の群を連野原に往き青草を食はせ日のあるる時の日蔭に連往き雨風の時の木陰山陰に連往き又群の中に病氣のあれば圓に休ませて餌を與へて道に迷ひさうなのをあれば呼び弱いのがあれば勞り若いのの抱々へ萬一迷我でも老さる羊のある時の勞足を厭はゞ負て家に歸る抔父母の子を養ふが如し又羊を牧ふ程の土地の何れ曠き野原あれば時々狼や盜賊が來り牧者の食殺されまじと奪はれまじと一生懸命に狼と防ぎ盜人と戰ひ群羊のために生命を失ふてとあり牧者の群羊にさいして眞に忠義なるものあり諸君聖書を見さまつニスの自から我の善牧者にて羊のために生命を棄つと世上の人の貴道に迷ひし羊の如く周圍にの虎狼の如くあらゆる惡魔や惡人ありて罪と犯させ天に歸るの道を忘れさせニスの美しき聲ありとも耳をねさへて聞かぬやうにせられ大人も童子も唯滅亡を待つのみの有樣あり然るに我等人間のために善き牧者あるニス君あり我等を助け救はんとめに波風あらゆる此世に下

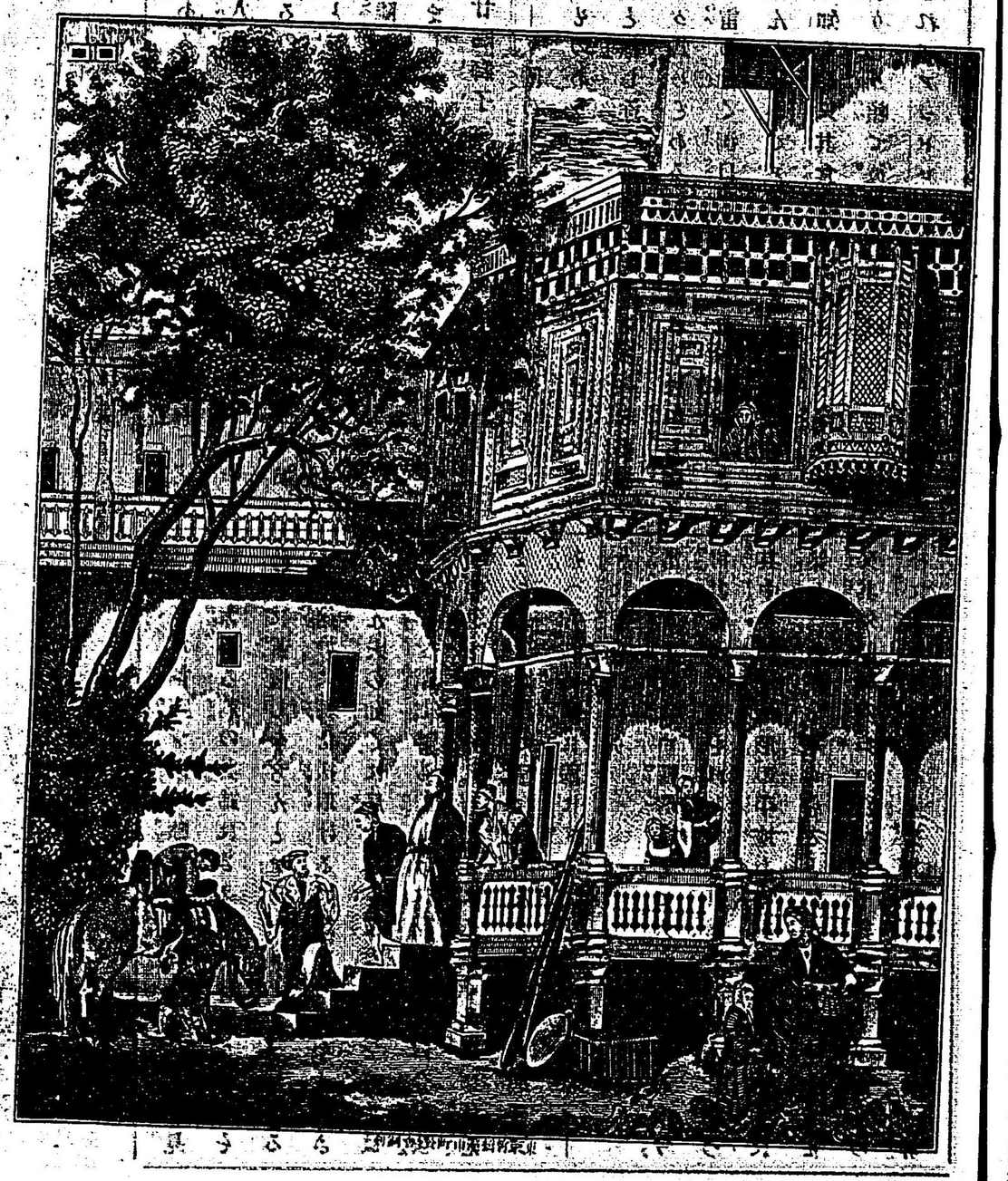
り我等を愛し生命の水の所在を知らせ青き安全の牧又猛き悪魔も居らぬ天に往く道を教へさまへり如何にして善き牧者の証據を見せたまひしや世人の代とありて其生命を十字架の上に棄たまへり諸君よ我等エス君を信ずるものの幸福あらずや我等のために生命を棄て我等を保護たまふものあり諸君の殊に悦びて小兒を受けたまふ是のごときエス君の能はざることあき手に抱かるゝことを好みたまはざるやいざ今より「エホバの我と牧者なれば我世に住ど乏しくあらず」とダビデの詩をうたひませう

第廿三　ハテーの隣人

路加傳十章廿五節已下三十七節に曰く「爰に一人の教法師あり起て彼を試み曰けるは師よ我あにを爲べ永生を受べきやエスに曰けるは律法に錄されしは何ぞ爾いかに讀や答て曰けるは爾心を盡し精神を盡し力を盡し意を盡して主なる爾の神を愛そべし亦己の如く隣を愛そべしエス曰けるは爾の答へ然り之を行へ生べし彼自らを罪あきものにせんとてエスに曰けるは我隣とは誰あるやエス答て曰けるはある人エルサレムよりエリコに下るとき强盜に遇り强盜その衣服を剝取て之を打擲き頻死にあして去ぬ斯る時に或祭司この路より下りしが之を見過にして行り又レビの人も此に至りて進み見て同く過行り或サマリヤの人旅して此に來り之を見て憫み近よりて油と酒を其傷に沃これを裹て己が驢馬にのせ旅邸に携往て介抱せり次の日いづる時銀二枚を出し館主に予て此人を介抱せよ費もし增べ我かへりのとき爾に償ふべしと曰り然べ此三人のうち誰か强盜に遇し者の隣あると爾意ふや彼云ひけるは其人を矜恤さる者なりエス曰けるは爾も往て其ごとく爲よ」

此本文について面白き話あり「ハテ」と云へる六七歳の女子ありしが或る朝家内の祈禱に父が此本文を讀むを聞き後日あるよき所に坐し幼心にも深く此本文の親切なるサマリヤ人のことを感じ盜人にあひし人を助くることを考へ居しが已に學校へ行くべき時となりされば帽子を冠りいろ〳〵支度を整へンスタと云へる婦人の立さる幼稚園へ行きさり未だ家を出て間もなく兼て熟知る洗濯屋の女が泣居さるを見ハテ思ふやう盜人も近所に居らぬあるべし何故に彼見いかく泣居るやと氣の毒に思ふの餘り近よりて其理由を問ひしに彼答へて今家を出るとき五錢持て來さが三錢とあるいくら探そも見ぬぞと聞きハテ然べ一緒にさがして見やうと其女をつれて彼方此方とさづねさるに折よくも下水の傍に二錢あると見出しまが他の一錢い何分にも見あさらぬハテい己の持る一錢を與ふと云ふに彼の少女い心配して之を貰つさら母様に叱られいせぬうと云ふとうちけしいへエスが石筆を折されば其代として母人の奥へ玉ひし一錢あり折さればとて用にあいざるにあらぬ貰ひさる上い我物あり此一錢を參らせさうとて母人の叱り玉ふとい云ふとかく親切に說き聞かせて奥へられされば少女の悅び大かさあらぬにてこしあがら家路をさして歸りゆきさりハテい心の中に路加傳の人い疵を受さ人に銀二枚を與へさりと已い今一錢を與へしが幼兒にい一錢にてもよきやあど思ひて學校に行きさり學

校の休の時に生徒ハ皆面白さうに遊び戯るゝ中にジニと云へる少女ハ不具にて他の幼児と遊ぶことを得ず獨り上段に腰かけて羨しげにあゞめ居さりハテハ遊びあゞら度々此ジニと見やり又氣の毒に思ふの情やみがさく傍に走りより共に坐して伯母の與へさる手帳と出し之と示して悦べせさりジニハ遊び仲間あぐ力と落して居さる時ハテゞ來りて親切に慰め呉されば多の幼児と共に遊びさるゞ如く悦び家にハ種々の書と貯へあれば夫と集めて書と製へやうあどいそ〳〵悦び居さるいよ〳〵稽古も濟さればふテハ帽子と冠り學校と出んとするときレスタ先生ハテと招き妾ハ近眼にては見えぬゞ汝の眼にハ見もるあるべし妾ハ指に傷ゞつきさりと思ふありと云つゝ指と出し見さるゞと見れば卓の隅より細き糸指にからまりくひこみて傷とつけさるゞありハテハ聖書のサマリヤ人のことと思ひ出し若し酒と油ゞあるゞあら此傷に塗りてまゐらせんと云ふレスタ先生ハ之と聞て笑とふくみよくも聖書と覚え居るとよ妾の指ハ何もつける程の傷にハあらず妾ハ汝ゞサマリヤ人の如く隣人の行爲ゞあると知るゞあり汝ゞ他の幼児と離れてジニと遊びて彼と慰めさるハまき行爲ゞありとハテハ之ときゝてあれゞ隣人の愛ゞありや若し然ゞあらば困て居る少女に一錢與へしこともありとレスタ氏ハ之と聞て悦び大うさゞらぜオ〳〵夫こそキリストゞ譬に話し玉ひしことにて其行爲ハとりも直はさず隣人の愛とゞあらはそものゞあれと云ひきけらればハテハ是ゞきゝて悦び斜ゞあらず家に歸りしゞ其夜床に入るまへ母に向ひて母上よふハテハ今日隣人の行爲とゞあしさり聖書



に記してあるとはり紙と受さ人と助くることのみゞ隣人の行爲でいおく助けのいりようのとき助くるのゞ其行爲ありとレスゝ先生ゞ語られさりと毋いきゝてどうゞ後ゞまでもユスのさめに隣人と助くることと忘らぬやう心ゞけよといましめさりとゆや

第廿四 獅子知恩

昔ゞローマ國の盛りし頃黑奴アンドロクルスと云ふものありローマより逃れて己ゞ本國に歸らんと欲し途に沙漠と過けるゞ一日追捕とさけんゞ爲めとある洞中に隱れしに忽ち獅子の咆聲雷の如く洞口に聞えされゞ其棲じきと云はんうさおくアンドロクルスい畏怖て置く所と知らゞ只其食とおらんことと恐るゝばかりありしゞ頓て彼の獅子い跛行ひきゝ入來りされゞアンドロクルスい畏縮て蹲居さるに獅子い前蹄と彼の膝にかけさりよくゝ見れゞ大ある刺の其蹄にさゝりさるあり扱てそ此痛に苦惱しおらんとアンドロクルスい忍るゝ徐かに刺と抜取けるに忽ち痛や去りさりけん犬の如くに尾とふり彼ゞ手足と舐まはりて頻と獻じさも嬉しげに見えされゞ今い安堵の思と爲し勞れしまゝに久しく此所に休息せり夫より出て國に歸らんとしさるに追手に捕へられて遂に國に歸ること能はゞ再びローマに送られさり

當時ローマにい戰刑場として大ある觀物あり今尙其舊跡と存それど大畧其構造と述んに先づ其中央に隋圓形の平地あり其周圍幾尋の上に築上さる堝と廻らそこと幾十層あると知らゞ又其外圍の門戸い百と以て數へ其より內圍の欄に通ゞる階梯あり又其下にい猛獸檻あり罪

囚檻あり猛獸檻にい獅子、虎おとの猛獸といれ罪囚檻にい彼の猛獸に食はゞべき死刑の者と入置さり此罪囚い重に大罪人奴隸の罪人及び基督教徒あり扨此觀刑場にて刑罰と行ふ時い

縉紳貴顯と招待し無數の老少男女場中に羅列し其中央の平地にい彼罪人又い基督教徒と引出し次に數日間餌とさちて飢させさる猛獸と放ちて之と捕食ゝしひることあり

却て說ぐアンドロクルスい奴隸の身として苦役に厭ひ本國に逃れ去らんとしたる罪により彼觀刑場に引出されて猛獸に食はゞべきことに定まり其期日に先ち頃日新に生獲さる大獅子と數日前より餓させて彼場內に放ちされゞ何りい以てさまるべき直に飛び附き引裂食いんゞ勢ありしゞ其獅子いアンドロクルスと見るより忽ち勢初に似ゞ徐々這ひて側により舐め親しみて戲れ遊ぶこと羊兒の如し其理由如何彼既に沙漠にて相識さる獅子、おれゞ其恩と忘れゞして斯くい親しみ狎て其慈と忍びしあるべし是によりてアンドロクルスい其罪とも忘るされ剩へ其獅子と賜りされゞ夫より之とひきてローマの府と通行そるに恰も犬の如くありしと云ふ

因に云ふ如是畜生僅に一刺と抜りされる恩と知りて其人と親愛そること彼の如し然るに眞知眞能と具へさる人にして或い却て恩と忘るゝものあり我等日々天父の恩と受ること數多あり然れどいまだ曾て一も之に報

いさる所おく加之我儘氣隨に世と送て天父の命に背もの亦尠しとせぞ我等此獅子の善心に感じて天恩に報ゐる所おうるべけんや

第廿五　名とき

いとうるはしく　うつくしき　とさおごとも　が　そのちゝの　手にゥゝへられ　その　の　ひざにのせられ　ふところに　いだゥれ　くるとゥるさしと　おもはしめさぞ　よろこびて　うけいれませば　そのみぎに　ひだりにめぐり　そのまへに　うしろにそひて

エスきみと　おや木とさのみ　つさうつら　はひまつはれる　ごとくして　みてにみわし　にそゞりにし　そのとさおごれ　エスきみと　いゥにおもひし　世のひとの　つみとゞ　あらひ　きよめんと　さゥえとそて　世に　くだり　おいもわゥきも　うじてきも　ゥあるとも　へだておく　としへみちびき　さからひて　あだとおりぬる　ひととさへ　しりぞけまさぞ　さゥぶれる　こゝろとかへて　とさおごの　むあ　しきこゝろ　もてよゥし　もし去ゥらぞ　ゝ　ちゝのまそゝあ　まつみくにゝいる　こともかたゥるべ　しとねもごろに　さとしませるそ　世　のおゥの　つみある　ひとゝゥきりある　おのゞちゥちと　さと　りとゞ　さのみてさらに　みちゥらも　その　みさとりも　いやさゥき　わゞおはゥみに　さゥらふぞ　おろゥおりける　まさあるゝ

おのゞちゥちと　そのさとり　さらはぬこと　とゥりそめのことゞさとおし　いさづら　にそゞしてゥみに　ちゥよらぞ　あるゝさ　ゥぶり　みとしへと　あざけりわらひ　とは　ざゥる　しれものとさへ　そてしとの　ちかひさゞへぬ　ゥみのみ子　エスキリストの　みひざもと　みあしのもとに　ひれふして　とさおこの子のごと　へりくざり　そのふところに　いざゥれて　おゞくめぐみと　うけよつ　み人

第廿六　偷乘

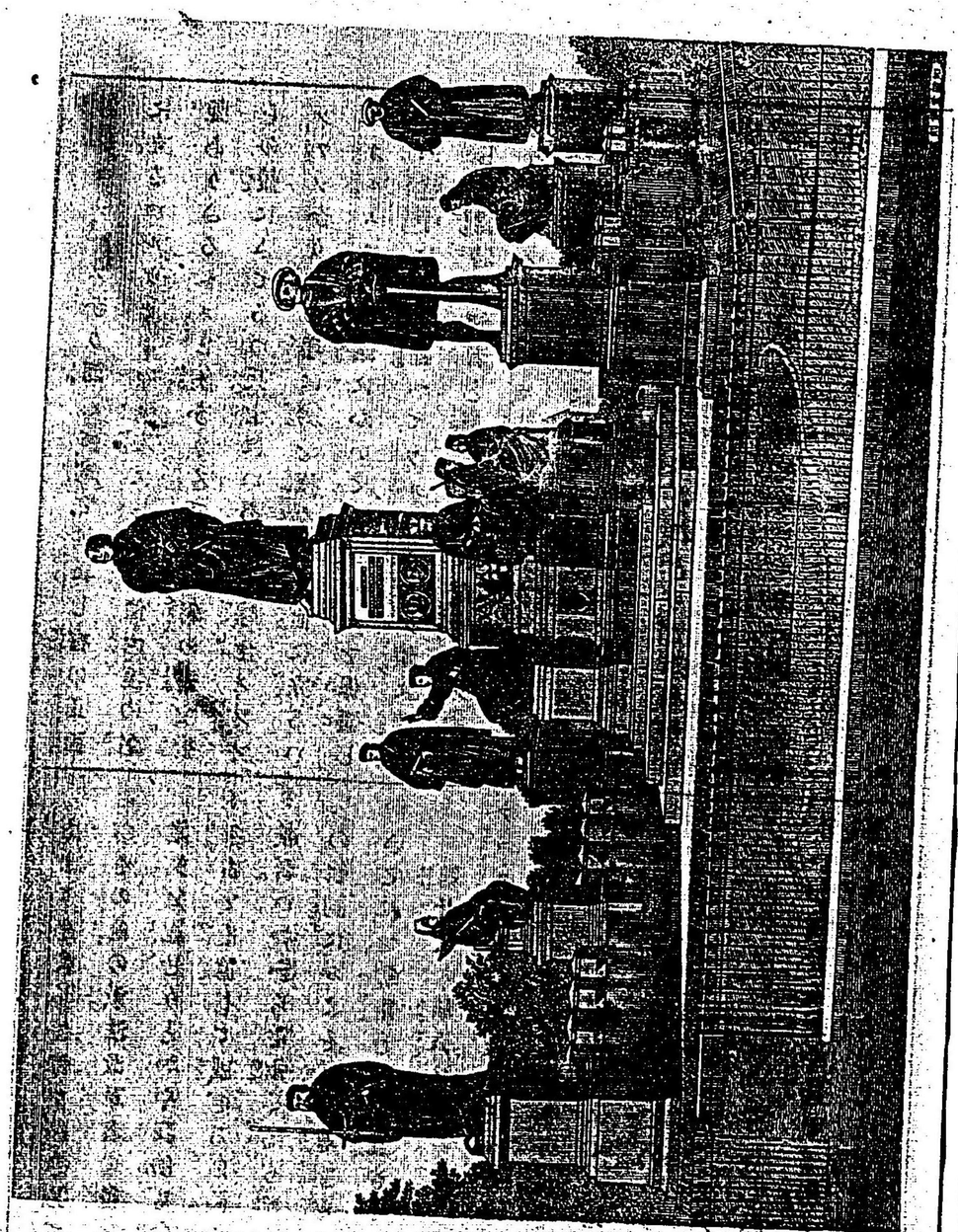
米國ニューヨークの市街ゝ繁華の所にて鐵道馬車も數多ある其中に本道の馬車ゝ大きけれゞ二匹の馬に牽ゥせ車掌もつきて諸事取締も行届けど横道の馬車ゝ小さき故馬も一疋にて車掌もおけれゞ別に賃錢の請取人もおしされど其國人の正直おるに任せ賃錢の拂方ゝ乘客の意の隨おれども此馬車に乘ときゝ何れも直に御者の後にある錢箱に定めの賃錢を納ることおり妾一日かの横道馬車に乘けるに同車に乘らんとて道の傍に待居る人の其中に僂童の癈疾と見受ければ彼僂童ゝ首尾よく此車の登段に上り得るや否と心と付しに頓て彼癈疾者ゞ登段の上に閃然と飛乘しと見れゞ此ゝ如何に僂人抔にゝ似もやらぞ脊骨ゝ忽ち眞直に伸て登段に止まり車の後薩に身と潛め已ゞ乘しと御者ゝ知るやと覘ふ樣子おりしゞ彼所に居る容貌と視れゞ癈人おどゝゝ思ひもよらぞ脊筋も伸てしゥも壯麗しく人も見回るべかりの美少年おりき　さて彼の童子ゝ市街馬車に乗り娯樂廻りし報とて最も貴き賃錢と拂ひしことと知るや知ら

ぜや二筋三筋乗し後妾ハ車と下んと思ひ彼の兒にも共に下て散歩せゞやと問ひけれゞ彼少童ハ同意せり車と下りて其名と問へゞマーテンハルーサル、スミスと答ふ妾ハ如何にマーテンよ汝ハ名に命られし其由縁の善人ハ嘗て偷竊せしてとありとハ思はれぜと云へゞ彼の童子ハ紅き眼と見張り妾と屹とにらみ稍く驚き且怒れる面色にて僕亦偷まぜと云ひけれゞ妾ぬて云ひけるハ又彼善人ハ謔言と云ひしりと思はれ妾僕も亦謔言とゞ云はぜとされど妾ハ一二分時前に汝と癡疾の少年と見受さりと云へゞ忽ち面色和らげ否とよ僕先に戯れしのみと其ハ誰に戯れしやと問へゞ御者にと答ふ汝妾に戯れハ爲ざりしかと問へゞ否夫ハ思もよらぬことありと汝自から戯れしやと問へゞ固より然らぜと答ふ神に戯れハ爲ざりしかと問へゞ其儘答あし再び彼に問ひけるハマーテンよ汝戯れに癡人とあらゞ後に汝ハ癡人とあらん彼云ふ僕然ハ思ハぜ決して他の童子の如く偷乗それども危嶮あしと何様仕方に由てハ恐もあからんあれども汝ハ他の兒童と同じく詐偽騙術の危嶮に渉れり汝癡疾と養成さんとそるの危嶮に渉れり汝生涯事業の爲にも娯樂のさめにも不適當なる不具癡疾と成行き汝の筋骨其用と失ハゞ其遺憾果して如何にぞや能々忍そべきことあり若し不正の欺戯により本心と曲撓さる詐偽の兒童と養成さゞ其遺憾ハ愈々甚太しからん然れゞマーテンよ本心と眞直に保つべし心中眞直なるべし面して汝ハ此世界に於て神事と爲さんと用意そべし汝の爲に神の貯へさまへる善事ハ汝之と得べし夫ハ神ハよきものと直行者より寄ハ也(詩八十四、

一と云ひて袂別に臨み握手して曰く少年よ汝よく之を記臆せよとマーテン答へて曰く僕必ず之を記臆せんとマーテンは此約束を守らんと欲するものゝ如く見えさり

第廿七　教法改革者の像

獨逸國ウオルムス府にルウサルの像あらびに氏とゝもに教法改革のことに盡力せる人々の像あり抑ウオルムス府は教法改革の始にあさりてルーサルゞ國帝チアールス等五世および數百の王公貴人の前にさち教法改革の主義を確守して屈せざりしところあればその碑を建その像を置には最も適當の地といふべしさてこの像は一千八百五十九年にその工を起しおはよそ九年の星霜を經て落成せるものにしてその費用八万五千圓ありといふ左手に一卷の聖書を持右手をその上におき天を仰ぎて中央の臺上に立るはルウサルの像にしてそのウオルムス府の會議の眞中に立て我こゝに立り如何とも他に爲すべきなし神よ我を助けたまへアーメンと斷言せるときの形容を摸りさるものあり像の高一丈一尺人間の長におはよそ二倍あるべし臺の正面に彫刻したるは前に擧るところの有名の語あり臺の側面にはさみたるは氏の生涯中に逢遭さることゝ氏の親友の肖像あり臺の四隅に座せるは氏の以前他邦において教法改革に盡力せるさまさは氏のころ氏とゝもに盡力せる人物の像にして正面の右隅に座せるは英國の教法改革者ゞロン、ウサクリフあり右手を擧て天を指し左隅に座せるは伊太利國の教法改革者サボナロラあり後の隅に座せるは一人は佛國の教法改革者ピートル、ワルドウ一人はバセリヤ國の教法改革



者ジョン、ハスあり而して劍と杖にし右の正面に立るハルウサルの親友にして寛仁大度の名聲ありさるヘスセ侯あり左手に一卷の書と携その後にさてるハ兵士にハあらで學士メランクソンあり右の手に劍と携左の正面に立るハウオルムスの會議においてルウサルと保護しその途中に氏と捕べてツルト、ボルグ城に潛伏せしめ當時の智者と稱せられさるサキソニー州の君フレデリッキ公あり公の後方に座せるハ當時有名の學士にして文筆と以て大に教法改革の事業と助けさるジョン、ロウクレンの像ありその他あは二個の像あれどもこれ想像に係れるものにして實に世に在りたる人物の像にあらさウオルムス府ルウサル像の記大約如此

因に云この像の落成せしとき獨逸國民ハ四方より來會し盛會と開き以てルウサルおよびその他の教法改革者の德と賞賛し且その偉業と祝せりとかや我僧も今日この圖と觀往古と追憶して感さる所淺少からさ詩篇に義者ハかあらさ永く誌られんとありまさ主の御詞におよそ我と尊重さるものハ我もさこれと尊重せんと宜あるかあ

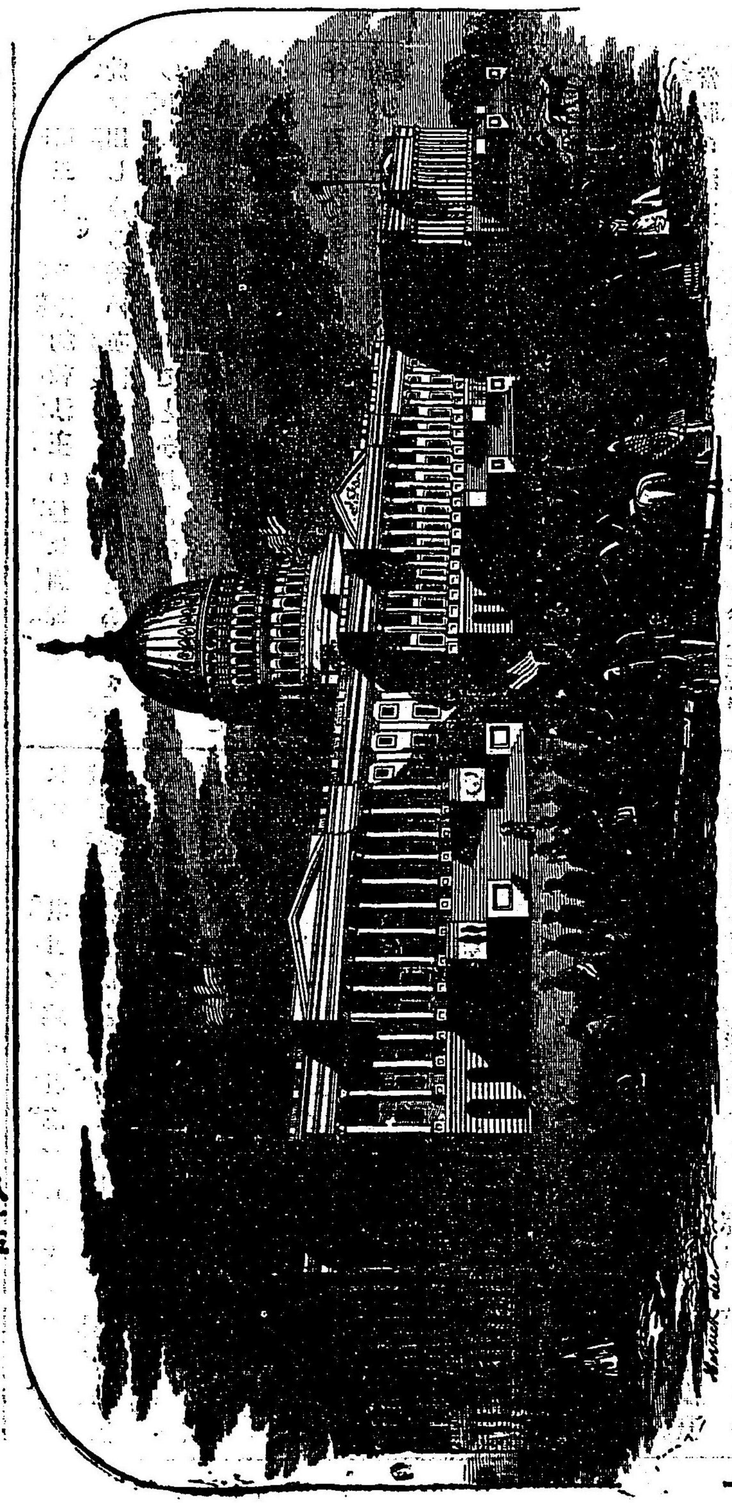
第廿八　旅人木

アフリカ洲の東にあるマダカスカーと云ふ島に旅人木と稱へる木あり太さ幹あり芭蕉の一種にして大あるものにてハ地より三丈位ハ枝あく夫より上に葉のひろがりさる樣ハ恰も大ある扇とひらきさる如く大人島の角抵もりくまで大ある扇ハもつまじと思ハるゝ程あり此木ハ如何ある暑中雨あさ時といへども其葉の莖に清き水と含むこと甚だ多く旅人のさめに

ゝ井戸の用と爲そものあり夫故旅人ゞ咽の渇きさるときゝ流水とさゞと苦勞もおく其木の水としさふうに飲むことゝ得べし此旅人木の斯く多の水と貯へる理ゝ夜に入りて大おる葉の上に下りさる露自然に集りて一二滴づゝ莖とつさゝり葉の根にさまり何時でも水の入用ある時ゝ木と伐るに及べゞ小刀又ゝ刺あとと莖の根にさし入めゞ直に水流れ出るあり水ゝ少し木の味あれども決して飲にくゝゝあらゞゞと云ふ此島の東部にてゝ其葉ととりて家根と葺き莖ゝ家の分界ともあし又破目ともあせり皮と剝てよくさゝき床に敷き葉の青きゝ品物と包む反古の代ともあるべく降雨のときゝ桐油紙の代とあり又朝市に行て見れゞ多く其葉と賣りて居れり皆標布ともあり皿ともあり鉢とも爲り又摺みて匕の代茶碗の代ともあると云ふゞ此木おどこそ金のおる木の代ともあるべしと思ゝる

第廿九　ワシントン府の公廳

左に見ゆる横向の畫ゝアメリカ合衆國の都府ワシントン府公廳の圖おり抑ワシントンの市府ゝ大さに於てゝニューヨークおどに及べねど市街建築の美麗おることに於てゝ然までひけとらぬ府おりメリーランド州とヴァージニヤ州の間と流るゝポトマク河の東岸にあゝて此河ゝワシントンの所にて十余町の幅ありて陸分深きゆえに大船もさしつゝへおく入り來り商賣も盛に美麗の會堂あり商店あり遊園あり學校あり市街の造りゝさゝ此公廳と中心にして蜘蛛ゞ八方へ網とひろげさるゞ如く縦の通りよりゝ何方にありても公廳と望み見るべし公廳ゝ皆大理石にて造り高きところにあるも



ゝ景色最も美おり大陽にかゞやくときゝ柏も雪のふり積りしゞ如く其内に郵便局大藏省海陸軍省あり初建りけさるものゝ英兵に燒れ此圖のゝ文化十一年より十年かさりて落成し左右の袖ゝ嘉永四年に出來さり中心の高き所三十丈にして雲際に聳えてさとり

第三十　英王約翰法王の使に謝罪そ

此に出しさる給ハ英國史に然ることありと世の中に知れ渡りさることあれど語りきらせん稚兒童に抑英國王約翰と稱せしハ今と距ること六百餘年第十二世期の末の年即耶蘇降世一千一百九十九年の即位にて第十三世期の始に跨り一千二百十六年まで彼國と知し召さまひし國王にぞおはしける今此給解にかゝらんに話三に分る

（一）傲慢ある祭司の話

給の正面の椅子に倚れる男と見よ是即ち羅馬法王の使にして又代理使とも云ふ祭司あり扨當時の法王とイノセント三世と稱せしゞ歴代法王の中にも最尊大にして其權威も亦最盛に在しまかゞ予ハ是之と傲慢ある祭司どハ申そあり又此給に出さる代理使ハ只其主さる法王に代りて其旨と述べ其意と行ふ者あれど是も又傲慢ある祭司とハ云ふべけれ或る時彼法王ハ英王約翰と紛議と起せしに始の程ハ英王も法王に抗論しさまへと法王ハ約翰の王冠と剝奪せんと主張し其臣民に宣告して王命に從ふべゝらぎと云ひ又國王と始として其祭司其臣民にも激會と開くことと禁制し一切の激務と行ふことと停止しけれゞ國王大に恐れて罪と法王に謝し代理使の足下に恭しく王冠と服そるの許可と請ひしに無歎にも代理使ハ王冠と足下に蹴落しさりと云ふ是實に傲慢ある祭司あらぎや而して其口實と聞けゞ其身ハ基督の僕にして其代表ありといふと雖も彼寛裕温良なるエスの爲にハ似もやらぎ聖書に云はぎや凡そキリストの靈あさものハキリストに屬せざるあり（羅八、九）と

(二) 屏弱ある國王の話

扨此繪解の次の話は英吉利國王約翰のことなり初め英王約翰は法王と爭論を開きしより敬傲なる祭司は當英國教會の全權のみならず國家の大權をも握ちんとせひ英國教會の上長官なるケンタルバリーの大監督を命じ又王位に即くべき者をも撰定し廢立の權をも取らんと請求しけれど國王に於ても人民に於ても是れ容易のことにあらざるもそれ戰爭とも起さん勢あり然れど約翰王は法王ゲ斯る權威を取らんとすると之を聽さるは勿論なり固より斯の如き約束を立て王位を服そべき條理なきはずなれど法王英國の教會と其政府に斯る權理を請求せんとはなれど英國王これを拒ひ當然なりるに約翰王は忽ち弱身を顯はし此紛議を放棄して惟命是從ひ何時何人と限らず法王ゲ意のまゝに王冠を與奪するの權理を賜ひ敬し敬て法王の使臣に謁し英國の王冠を服するの許可を請ひし約翰王ゲ恥辱の恥辱といふべく實に屏弱なる國王なり英國歴代に未だ嘗てなきの最大恥辱なりけり

(三) 勇敢なる國民の話

今第三段の話に移りて英國人民の勇敢なると語るは最も喜しきことなり扨に其國民と見さるるケンタルバリーの大監督及び全國政府の主

上なる英國王と彼に放任そると許さゝして當時の貴族なる英國の「バロン」等國民に代りて會議を開き國王親臨バロン開會のことを國王よりゲ布令せしめ「ヴス」河中なるルンニーメードと云へる島に於て其會議を開きけれゝ今い國王も詮方なく法王と約束しさることを取消し其屏弱なるゲ爲に放棄さる自由の權理を恢復して之を英國人民に保全そべき認可狀を作りさり世に之を稱して大法典と云ふ是實に英國の大幸なり其後約翰王いッシといふ淺き入海を渡らせさまいんとして痛く玉体を傷ひさまひしより一千二百十六年ニウアーク城に殂しさまひき然ゝ此繪の中に傲慢なる祭司と屏弱なる國王と勇敢なる國民との三のものを見ると云爾

第三十一　モーセの話

摩西い紀元前一千五百七十一年に生れさる人なるゲ埃及王の歴制にて其父母い據なく嬰兒の時河に流しさり然し幸ひ王の女に拾上られ久しく育られしゲ己ゲ國民の歴制さるゝと見るに忍びゼ遂に之を導て束縛と脱せしめカナンの地に自由と得させさり我等の主基督い厩の馬槽に生れてナザレに人と爲り其民乃ち我等の惡の奴隷と爲り罪の束縛と受ると見るに忍びゼ身と殺して天のカナンの道と開き自由と得させさり

第三十二　少女エミリー

茲にエミリーとおん云へる少女ありけるが其性利發にして少女らしきことゝ唯、暫のあひだにてはや九歳の時にゝ云ふこと爲そこと皆一人前の女とゝおりぬ暫時の間にても母親の他に出さる不在中あどにゝ吩咐と待さゞ仕事にとりかゝり小卓の傍にありて赤兒の妹と守り母親が歸るまでゝ何事があらうとも側と離れず昼飯や夕飯の時にゝ其所へ食物をとりよせて食ひ傍と去らゞ居さり未だ十歳にもあらぬ身にて母親が裁ちて與れば自身衣服と縫ひ母親よりゝ幾許にても好に任せて新に調へる許諾そうけ自分の算筭とも所持して入用の衣服といれ置けり然し剩殊勝あることゝ年齢も和かさる此年にてエスと愛し何事と爲しても

エスと喜ばせ奉り他人とも導きて救主と愛せしめ喜ばしめんと心掛け貧乏人に心切にして知己と幸福にせりエミリーゝまゝ〳〵思惠と智惠に生長し其生涯ゝ最と有用にして且愉快ありしが月に村雲花に嵐の跡に洩ゞ不圓しさ病に此世と去りしが其事業と見聞せしもの一人として感心せざるゝありきと其一と示さんに土曜日毎にいと大なる鍋に肉と野菜とを煎て汁と製へ日曜日にゝ病人と貧乏人に施しさり又クリスマスの時にゝ貧乏人に進物と送るとゝ幼み先町内の貧乏人の家數と調べ手帳に記し父母子供等に與ふべき物夫々とり調べ一戸ゝ一羽宛に七面鳥と買ひ料理方と不案内のものもあればとて自分で烹燒し野菜と菓實と添贈物と共に籠に入れ備ゑ人に依頼て極さる家の入口に夜中配り置き何方より來しか知れざるやうにし貧乏人の喜ぶとも也己の喜とも

り是の如き少女なれバ九歳を一期として死し
されども人々之を惜み其話を聞く者坐に袖を
濕せしとぞエミリーハ今こそ神を愛する者の
ために備へられたる天の家に行きて神の御座
近く居るならんがこの本を讀む方々も此エミ
リーに倣ひ玉ハんことこそ願ハしけれ

第三十三　面白い時

此面白さうに遊び戯る〻童男女ハ何も思ハず
夢中になつて騒ぎ居る所と見ゆれど我輩のチ
ト心配することハ遊戯が困じて悪戯とならぬ
やうにしたきことなり遊ぶことハ悪事にあら
ず滑稽とすることも罪戻にハあらねど餘り過
て人を困らする程にならぬを度とすべし諸君
の父母や又ハ教師ハ諸君が悪戯をせぬやうに
用心すべき筈常に其ことを注意て居れり此書
を見るに遊戯の隊長ボビー先生ハ卓の上にあ
がり込んで壁に畫をかく所なるが分明とハ見
えねど眼鏡をかけたる老人の面のやうなれバ或
ハ學校の先生の似顔なるべし他の童兒を笑ハ
するためとハ云へ石盤か紙にかくハ自由なれ
ど壁に是のやうなるものをかくハ甚だ不都合
の次第なり諸君ハ是のやうな悪戯をしてハな
りませぬぞと一本きめ込み偖平日學校でよく
勉強し善くならバ休業中に遊ぶハ至極よろし
斯く遊びて身体を養ひなバ學校の始まる時
に勉強するに都合よかるべし此畫の様子を見
れバ確に學校の休暇中に相違なしこの畫本を
讀む方々も近々休暇の時となるべし然し其遊
戯る〻時も神を悦バすことを忘るべからず神
を悦バするとハ諸君が爲し得る所にして又爲
ねバならぬことなり然し呉々も害になることハ爲
べからざる休暇ハ隨分面白時ですチー諸君

第三十四　かゞやけるもの

そのむかし　ありしときけど
そのときも　ところもあども
さらもきの　つもれるおよあ　老女
とさあごと　あまさつどれせ
よのあかに　いとよくひかり
かゝやける　ものゝあにぞと
とひしかべ　とさあごどもゝ
われはけじ　われとらしと
そゝみいで　あまよにひかる
はしあらめ　あつのまひるに
かゞやける　うあべらあらめ
うばたまの　よるさへひかる
さまあらめ　さはべにとべる
はさるこそ　ひかりかゝやく

ものあらめ　みるめまべもき
あまつひの　ひかりにまさる
ひかりあし　わきのよそがら
てりわさる　つきのひかりの
さやけさゝ　あにゝさとへん
あらそゝで　やさしきひとの
えがはこそ　まことにひかる
ものあれと　おもひおもひに
こさへぬる　とさあごどもと
うちあげめ　ひねにもびさし
みよやげに　まことにひかる
ものはさゞ　かみのとしへと
ひとそぢに　まもりてわもみ
もくひとの　あはくたゞしき
こゝろありけり

第三十五　クリスマスの歌

天地と　開き初にし　おほ神ゞ　世の罪人と
救いんと　其愛む　獨子と　かゝる賤さ
世に降し　人とおらせし　御業こそ　奇しう
りけれ　うくて其　神の聖子ある　基督わ
伯利坦てふ　鄕村の　厩のうちに　生れいで
布につゝまれ　馬槽にぞ　夜と明しける
其樣い　神の聖子とも　おもはえぬ　貧しき
賤の　去づゥにも　誹りてや　罪人と　救ひ
導き　たそけんと　聖旨と　さゞめける　其
思こそ　限なき　生命の水の　湧出る　源な
らめ　其水の　流とゝめて　潮り　東の方の
國士らも　神の示せし　其星に　導うれ　來
て　種々の　禮物さゝげ　我君と　さく歌
ひ　野に住る　牧人らも　聖使の　歌とうけ
て　走り行き　馬槽も在と　嬰兒と　拜みま

つりぬ　雲のごと　群る天の　軍勢も　あち
はれいで　最高き　神にい榮光　又地に
和平人に　めぐみあれ　祝ひつゝ
祝ひまつれる　例こそ　たふとかりけれ
今もあは　尊き卑き　おしなべて　數の主の
生れにし　昔時と　思ひ　悅て　神の恩と
罪に沈める　世の人と　救いん
ために　神の子ゞ　いやしき里に　生れ長ち
貧き家の　生計も　厩ひさまは　家造る
匠工の業も　怠らで　み親につゝへ　人の道
盡せるのみゝ　神の道　ひらきて人に　教へ
野ぶし山ぶし　雨にぬれ　風にもまれ
て　西に奔き　東に走り　諸の　病と癒し
鬼と追ひ　盲者の眼にわ　麗しき　光と與へ
耳聾し　人の耳にい　喜の　音とし　聞
えしめ　恩惠の手段　ありとある　限と盡し

世にませし　三年のほどは　枕そる　家さへわらで　世の人に　はづかしめられ　朝け
られ　苦しめられて　遂にその　救いんとする　罪びとの　手にとられて　恐ろしく
又はづかしき　十字架の　うへに殺され　血とおがし　世の罪びと　贖おひて　父ある
神に　かへらしめ　天つ聖徒と　もろともに　神の榮光の　かぎりなき　生命と得させ
たまひける　救の主と　うみさまふ　神のめぐみと
よろこびて　牧人らと　ともにもき　神のみまへ
にうちつどひ　博士とともに　たからとも　さゝ
げまつらん　聖使と　ともにうさいん　子どもらと
共にかたらひ　親しみて　神のさかえと　讃美ま
つらん

もきて見よ馬槽にいまそ嬰兒い
人とをくひのぬしのキリスト世
神の子のまづしゥりしい世の人と
とまさんとてのめぐみとしれ

第三十六　ワシントンと其父の話

この本を讀むものはワシントンと云ふ名をば未だ〳〵聞たことあらんが實にアメリカにてワシントンと云へば三歳の兒も知らぬことなき程の名高き人なり其生涯にありしことは度々種々の書に見もれば固より精しきことは記載せざれども氏は一千七百三十二年(我享保十七年)にアメリカヴァージニヤ州に生れ一千七百八十九年(我寛政十一年)に六十八歳にして死しさるが氏の在世中アメリカは英國と獨立の戰爭を開くに至り推されて米國の大元帥となり軍艦兵糧武具兵員將校軍署勇氣に不足なき英國を敵とし不自由がちなるアメリカの義兵を指揮し數年にして獨立の志を遂げ四海の波風穏なる時は米國初代の大頭領と仰がれ戰時には出でゝ三軍に將とし平時には入て政治に參ぜ

賢に古今無類智勇兼備の人と云ふべきなり然れば梅檀は二葉より薫しとや後人々之を尊敬しさる高德は已に幼少のときあらはれさり曾て氏は父より小き斧一挺を得さりしが大凡世の童子は是の如き具を好むものなればワシントンも大に之をよろこび早速屋敷内の木をあれこれと伐り試みしなるべしさて其邸中に氏の父が非常に大切にする櫻の若木一本ありしがワシントンは其ことを知らぬにあらねど面白きまゝに心もつかぬ忽ち持さる斧にて其櫻にきりつけ大なる疵をつけより氏の父はさりとも知らぬ彼方此方と逍遥しながら此所に來て見れば愛でいつくしむ櫻の木に斧もの付たる大きゞあり一目見るより打驚き近くに立るワシントンを呼びちゝつけ聲をあらゝげ目を怒らせ此木を伐りしは何者ぞと問ひさゝされ

てワシントンハ必定父に懲されんと思ひされば首ふりて否私ハ知りまうさぬと罪と戒ひて過と園丁の子に負しゝか否ワシントンハ其父の怒れる面とうちまもり震へる唇くひしばり後悔の涙ふりそゝぎ父上偽ることハあらぬ夫ハ私の所業ありと言葉とかざらぬ白狀されば氏の父ハ面とやはらげ余ハ此櫻の若木より吾子の眞實と愛せりと云ひさりと實に此根生ハ大元帥とあり大頭領とありて人々に敬慕され又今の世に至るまで其高傳と仰ぎぬものあさ二葉の香ありき

童幼諸君よ諸君もワシントンと共に偽ることハあらぬと云ふ一言と味ひたまへ童幼ハ去ばく偽と云ふべき試惑にあへば務めて正直あらんと心掛ざれば實以て危きことあり何につけても正直の利益ハ大あるものあり

第三十七　ワシントンの住家

此ハ是れヴェルノン山とて米國初代の大頭領ジョージ、ワシントンが幼年の頃より死に至るまで住ひさる家の景色にて忠信あるアメリカ人民のために一個の靈場とも云ふべきあり初此家ハ其異母兄ローレンス、ワシントンの所有ありローレンス曾て英國の海軍將ヴェルノンの配下に勤めしことあり因て其住所に名付たりと云ふローレンス死してジョージ其讓とうけ遂に此に住ひて此に死しさり其墓も亦此地にあり即ち下欄に寫し出せる絵ハ是あり

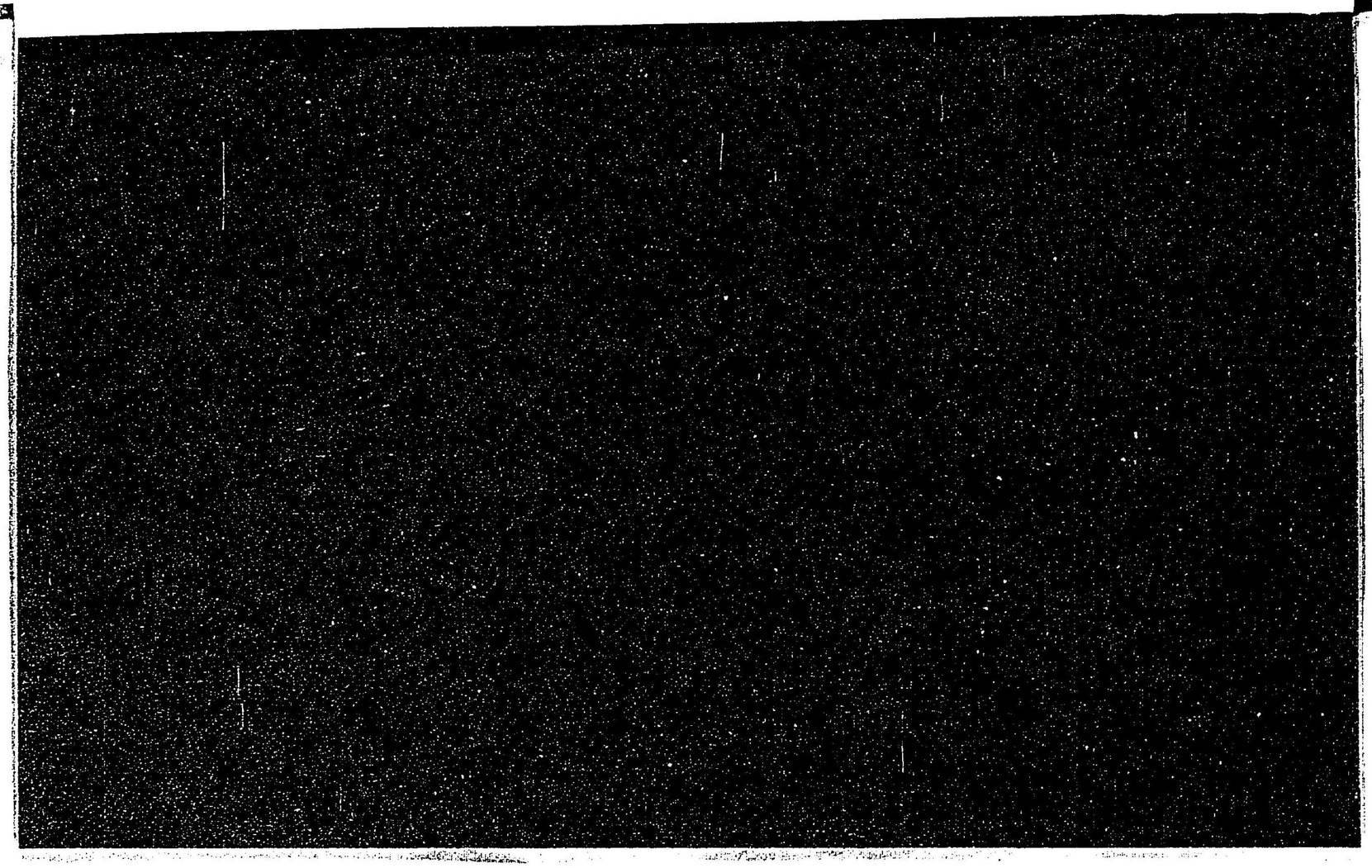
其家ハポトマック河邊の高燥ある所にありて河の上下を眺望して風景甚だ佳し其地ハヴェルジニヤ州の東角にてフェールファクス郡にありワシントン嘗て其友人某に贈れる書中に合衆國にハ何も其き不動産とてハあらねども熱さ寒

さの程と得て四氣ともに無絶ぬ河に臨みし高燥健全ある田舍こそ善けれといひしとぞ

其所に田畑數多あり別て小麥玉蜀黍烟草を耕作せりワシントンの傅夫の家と離家ハ恰も一個の如く其中に縫裁屋あり靴工店あり大工あり鍛冶あり車屋あり其厩にハ數多の馬あり其名と年齢と性質とを書記しさる簿冊あり其内にアジャク、ブリュースキン、ヴェリエント、マグノリヤ等の名を載さり又其犬小屋にハ數多の犬ありヴェルカン、シングル、リングウード、スウィートリップス、ミュジック、ツルーローヴ等の名ありと云ふ

ワシントンハ豫て政務に行屆きさりとの譽に名にしおふワシントンの持方にも能く行き屆きて勘定合も自ら劣らぬ其産業の持方にも能く行き屆きて勘定合も自ら大帳に載て萬事怠惰なく遲滯なく疎漏なく何ごとによらぬ爲べきことゝし思へば至極丁寧に爲し置さり其物産ハヴェルノン山ジョージ、ワシントンと焼印あれば其分量性質も表書の記に聊相違あければ大いに人の信用を得て西印度の諸港にてハ海關にても其荷

に限りて定式の調査さへもせざりしと云ふ又ワシントンの平生怠慢あきことゝ日常の行事と見て知るべし第一早起にして冬日ゝ味旦に起ること屢あり赤明に起さる時ゝ自ら燈火と点して朝食のときまで書と讀み朝食にゝ茶二杯と菓子二三あり朝食と終れば馬に騎りて當時農夫の稼穡そる所の田畑と巡り或ゝ自ら農事と助くることあり夕食ゝ二時に給べて宵にゝ早く茶菓と喫して九時寢室に入る日常一身の私事と營むことそら尚且定格あること大畧此の如し其人品常行知るべきあり而も革命の亂に方りてゝ勃然奮起して義兵と擧げ防禦攻戰して終に一大新國と建さるの大勇も亦此人にありとゝ實に驚ろくべきの極りあらさや後に文武の大權と掌握そるに至りても尚ゞエルフン山と以て棲息の所と爲し此に鵬翼と收め驥足と縮て田舍に安穩と樂めりと云爾



特52
82

幼児の友

国立国会図書館

020292-000-5

特52-82

童児の友

出版事項不明

ABI-0098